

関東大震災体験記

その時

あなたは

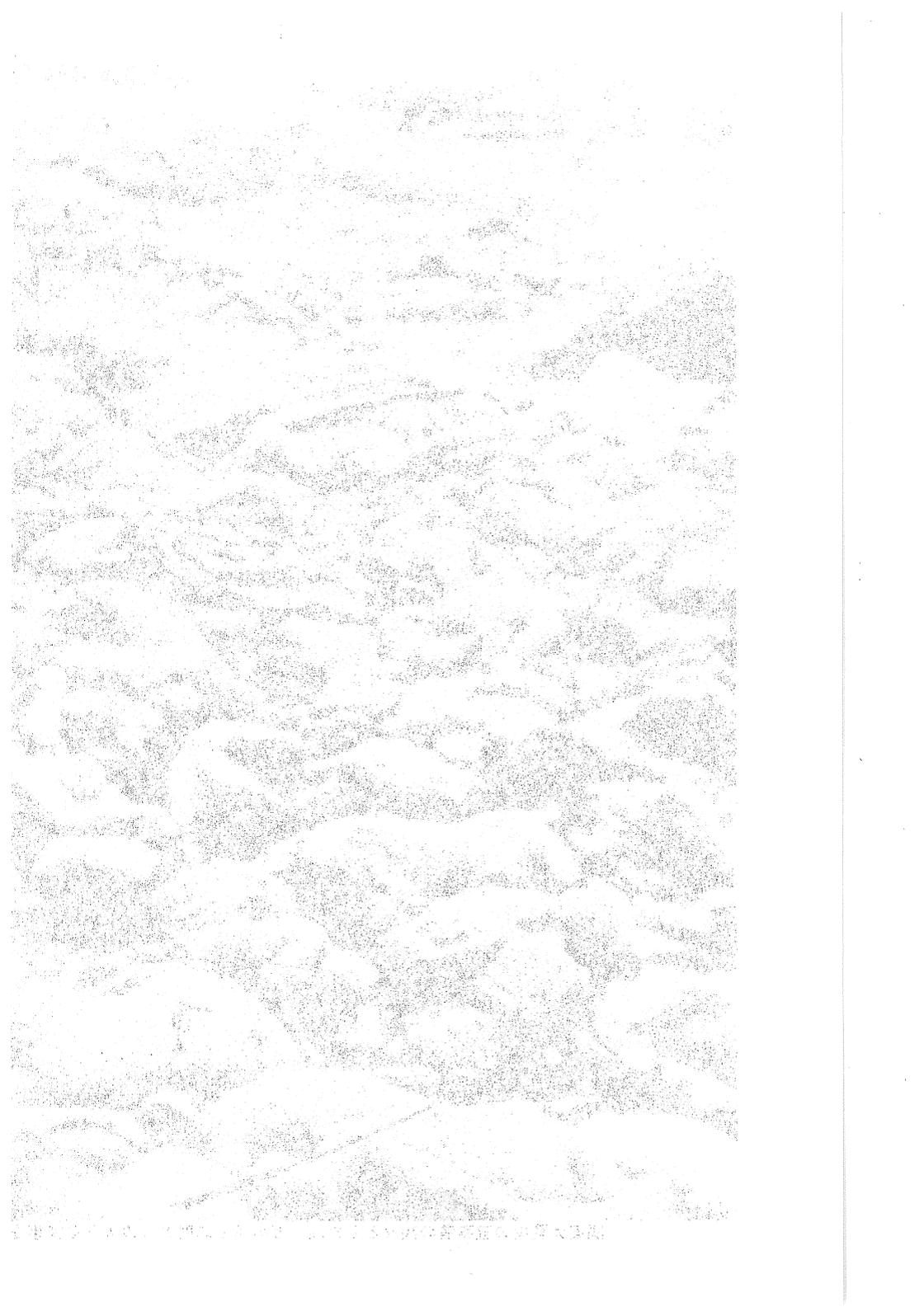


てもらいたくないと訴えているようです。つつしんで御冥福をお祈りいたします。

(写真は新藤元一氏提供)



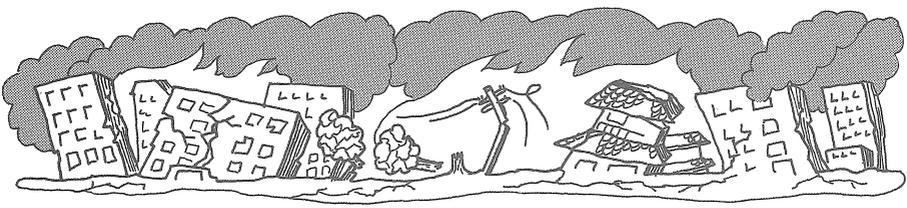
関東大震災の避難者の類々とした屍 どの顔も二度とこのような惨事をくりかえ





目次

発刊によせて.....	1
推せんのことば.....	3
関東大震災の惨劇.....	9
関東大震災体験座談会.....	15
往時の川口町での惨状.....	38
関東大震災体験記.....	46
宮城県沖地震の被害の状況.....	84
芝村での往時の記録.....	89
震災美談.....	93
大震災に対する避難の心得.....	97
関東大震災近県の震害情况概図.....	115
自主防災組織の進め方.....	116





発刊によせて

芝地区震災対策推進協議会

会長 今泉 栄 政

現在国では、東海大地震に照準を定めた「地震防災対策強化地域」を指定し、いよいよ本格的防災体制づくりが動きだした。このような時機に、芝地区震災対策推進協議会が発足し、真剣に地震対策と取り組もうとする姿勢は、芝地域の住民の総意であり、その成果が大いに期待されます。

ことに芝地域は、東京のベッドタウンとして急速に発展し、今や人口も八万三千余と増加し、都市形態も商住混在し、建物も過密化の傾向を一層強めております。

一方都市計画も順調に進行し、区画整理事業と併せて改良されているものの、地震等の災害に対する脆弱性が累積しつつあることは事実であります。

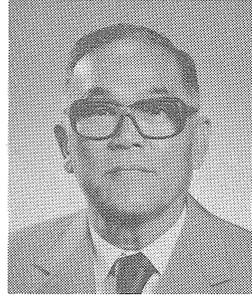
このような実態をふまえ、住民の安全の確保、初期消火の徹底、出火防止、避難誘導、交通規制、給水給食、医療、流言飛語の防止など非常時にとるべき対策は、それぞれ行政の各分野で研究し計画が樹立されても、当面の緊急処置

は、住民一人一人の手に委ねられるより方策が無いことを過去の震災例では物語っています。

防災は不断の心構え一つで、災害を小さくも大きくもすることができ、それにはそれぞれの家庭の中の防災対策が非常に重要な鍵になるわけです。地震は防ぐことが出来ないが災害をより小さくすることは出来るわけです。

芝村誌から引用すれば「天災地殃は人力の及ぶところにあらずとは言え、平素勤儉力行、万一に処するの覚悟あらしめば、又以て自然の脅威も減殺し得るものと思う」とあり、現代の警鐘として当を得たものと思います。

本書を企画し、後の地震に対する警鐘の書とし、広くPRにつとめようとす
るご努力に、また本書に寄稿された皆様方のご苦勞並びに編さんに当たりまし
た芝地区震災対策推進協議会、芝地区長寿クラブ連絡協議会の役員の皆様、更
には公務の傍ら最初より筆舌につくしがたい御尽力を賜りました芝支所（市役
所）の並木所長さん永瀬課長さん小笠原係長さんに対しまして深く感謝の意を
表します。



推せんのことば

川口市長 大野元美

昔から、わが国は多くの地震災害に見舞われ、惨劇が繰り返えされてきました。

地震国の宿命とまで言われたこの災害も、先人の遺された教訓をもとに防災への取り組みが探究され、被害を最少限に食い止める等の努力が重ねられているもの的一方では、都市の質的な変化、人口の過密化、交通機能の複雑化等によって、地震防災のあり方に新たな対応が求められているということも見逃せません。

このことから、私達は、日頃から災害に強い、安心して住まうことのできる都市の実現をめざして積極的に街づくりを進め、防災面でも可能な限りの方策を講じてきたところでありますが、こうした対策も、行政面からの措置だけで完璧が期せられるというものではありません。

むしろ、このことは、市民を一体とした民間の協力なくしては成就し得ない

ものと申しても過言ではないでしょう。

突発災害では初期の防災活動に期待する点が多く、そこに市民おひとりおひとり、家庭や地域を核とした防災活動の重要性が生まれてくるからであります。

折しも、六十九年の地震周期説が高まりを見せ、一方、政府も東海地区に重点をおいた地域防災対策強化地域指定をするなど、大地震発生を予期した震災防止対策が各所で講じられてきておりますが、地震予知技術が未完の現代では、私達も常にその被害が自身に及ぶことのあり得ることを念頭に行動する必要があります。

このよつなとき、芝地区では、他に先駆け、地区震災対策推進協議会を発足させて活動を開始し、さらにこのほど、この協議会が地区長寿クラブ連絡協議会と力を合わせて、関東大震災体験記と題したこの小冊子を発刊されましたことは、自主防災の急が叫ばれるとき、誠に時宜を得たものとして喜びに堪えません。編集にあたられた関係者のご労苦に深く敬意を表するとともに、この冊子が一人でも多くの市民によって読まれ、今後の防災意識の高揚に大きな力となって現われることをご期待申し上げます。

おわりに、現在、本市の市史編さんのなかで震災講の収録を企画していることを申し上げ、市民の皆様はその貴重な体験記、情報資料の提供などについて特にお願いをして本書推せんのことばとします。



推せんのことば

川口市議会

議長 新藤 勝衛

毎年九月一日になると、忘れていることを思い出したかのように、防災防災とさわぎ出し、一ヶ月も過ぎるとあとかたもなく忘れ去られてしまう。

これは日本人という国民性にもよると思いますが、災害国の国民として、大いに反省をしなければならぬことと思います。

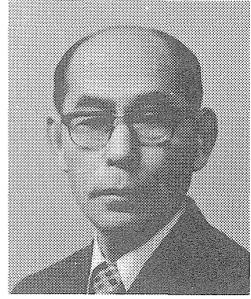
さて、市の地震対策調査会の報告書によれば、南関東地域に、地殻の異常変動についての調査結果が公表され、この変動が大地震発生前のいわゆる前兆現象の一環をなすものであるという説をとなえる学者もいるようであります。

また、政府においても、地震の予知について積極的に取り組んでいるようではありませんが、現在の科学力での程度まで可能で現実的なものにできるかどうかは、まだまだ問題が多いようであります。

そのようなときに、地域ぐるみで防災に立ちあがったことは非常に喜ばしいことであり、近隣関係の改善に果たす役割も大きいものと期待いたします。

何と申しましても、防災は点と線であり、それぞれの家庭での点の中での防災意識の向上に期待しなければ、線となることは非常に困難であり、点かやがて自主防災組織となり、市の防災計画とリンクされたあかつきには万全の対策が出来るわけでありませう。

今般、事業の一環として本書を発刊するにあたって、関係役員の方々の御苦労に深く感謝申し上げますと同時に、広く本書を推せんする次第であります。



推せんのことば

芝地区震災対策推進協議会

相談役 今 泉 武 治

“災害は忘れた頃にやってくる”とよく昔からいい伝えられ、語られて、誰でもが知っている言葉である。しかしその言葉の本当の意味を知っている人は少ないのではないだろうか。

人間社会が今日のように複雑多岐になり、都市構造も大きく変化している。今この頃、文明を謳歌し、人々の生活は豊かになってきていることは事実であります。しかし一面豊かになる、便利になるということは、反面自然に対する危険性が増大することを意味するわけがあります。

ちなみに家庭生活はそのほとんどが電化され、それが当然であるかのような毎日の生活の中で、突然電気が止ったとき、果たしてどう対処できるであろうか想像するだけでも恐ろしいことであります。

このような時期に、自分達の街を、自分達で守ろうと住民主導型の団体が出来、積極的に防災活動を推進しようと立ち上ったことは、地方自治行政の中で

大変意義のあることと思います。

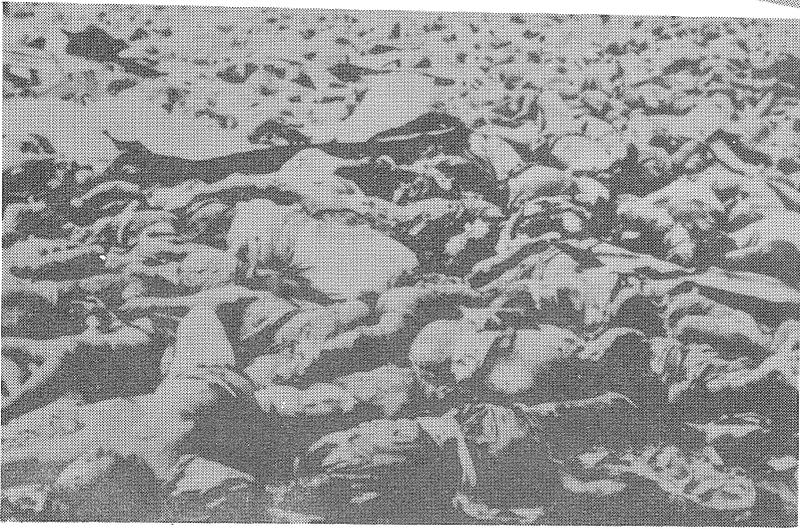
今般、事業の一つとして、PRの中で本書の刊行は当を得たものとして、先人の貴重な遺産として、永く光り輝やくものであると確信いたします。

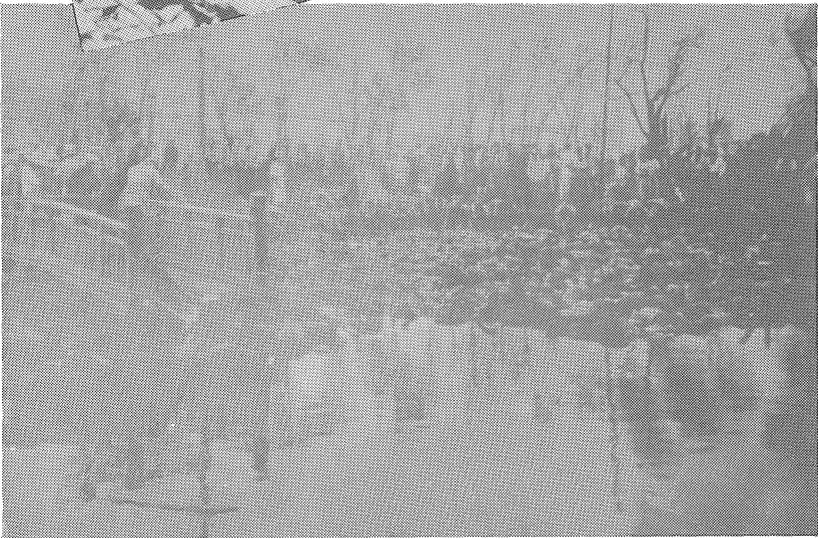
おわりに本書の編さんに当られた役員の方々のご苦労に対しまして深く感謝の意を表しますとともに広く本書を推せんする次第であります。

関東大震災の惨劇



(新藤元一氏提供)





〃
あなたは

もう

無関心では

いられない
〃

出席者の方々の紹介



芝地区震災対策推進協議会
会 長 今泉 栄政氏



芝地区震災対策推進協議会
副会長 小峰 貞蔵氏



芝地区震災対策推進協議会
副会長 小泉 増吉氏



芝地区婦人代表
小林 ふく女史



民生児童委員代表
松 波 広女史



芝地区社会福祉協議会
会 長 矢作幸三郎氏



川口市遺族会
会 長 横溝藤一郎氏



芝地区長寿クラブ連絡協議会
会 長 保谷忠太郎氏



町会長代表
平田誠四郎氏



司会 川口市農協芝支店長
清水 恒三氏(事務局)



消防団第5分団
団 長 金子 兼吉氏

震災体験座談会

テーマ 関東大震災 “その時 あなたは”

昭和五十四年九月十一日 午後二時三十分～四時三十分
芝公民館日本間にて

司会 大変お忙がしいなかをお集まり下さいまして、有難うございます。

実は国の方でも大地震に対する法律も出来、当芝地区にもこれに対処いたしましたして、各団体の代表の方たちにより、先月（八月）正式に芝地区震災対策推進協議会が発足いたしました。

そこで丁度今年が、大正十二年の震災から数えて五十九年目になりました、六十九年周期で大震災が来るのではなからうかという説もあるようでございます。

このような情勢の中で協議会が発足いたしましたして、今年の事業として先般、起震車による体験をしていただき、現在の若い人達に経験してもらったわけですが、大地震の恐ろしさを知らないこれ等若い人達へのPRといたしまして、現在各町会の長寿クラブに依頼いたしましたして、体験談の筆稿をお願いしております。それと併せて、本日お集り願いましたのは、関東大震災を体験した方々に寄っていただき、当時の震災の恐さをお話しいただき、それ等をまとめて、各家庭における対策の糧かたとしていただくと、このような趣旨で本日の座談会を持ったわけでございます。どうか一つ当時の様子を思い出していただき、十分なるお話し合いをお願いします。

それでは、まず芝地区震災対策推進協議会の会長さんに一言ごあいさつをお願いいたします。

今泉 皆さん今日はお忙しいなかお集りいただき有難うございます。

司会の方からお話しがありました通り、あの忌まわしい震災から五十九年経ったということ、もう当時の方々も相当年輩になっておりますし、だんだん新しい方が増えております。

そこでそのような方々から、体験者の座談会を開いてはどうかというご意見がございました、私も当年七十五歳になりますので、もう当時のことははっきり覚えておりませんが、当時十九歳の好青年であったことは事実であります。あのような大きな地震に遭うとは夢にも思わなかったわけです。

今日は一つ皆様方のお話しをお伺いし、その体験談を有効に利用させていただき、来るであろう大地震に少しでもお役に立てば幸いです。意のあるところをおくみ取りいただきまして、意義ある座談会にしたいと思います。

司会 それでは、当時を思い出していただきまして、お伺いして参ります。早速ですが会長さん、当時十九歳ということですが、その当時の様子をお伺いいたします。

今泉 丁度お昼ごろでした、何かゴーというような音が聞こえたように記憶しております。そのうち、あつ地震だと気がついたんですが、あとは何が何だかわからなくなりまして、閉めてあった奥の部屋の雨戸が、庭の方へボン、ボンとはじき出され、ふっ飛んでいくしもう外へ出られなくなりました。あとは揺れるたびに物が上から落ちてきたり、崩れたり、耳が馬鹿になっただけではないかと思いましたが、それから長押しがギシ、ギッシと軋むし……よくあれで潰れなかったと思っております。一方外では、長屋門が揺れるたびに屋根瓦の崩れていくのが目に焼きついております。

司会 それでは、小泉副会長さんはいかがだったでしょうか。

小泉 当時私は十七歳と若かったですから、よく覚えておりません。何しろ、あのようにすごい音がして、非常に揺れが激しくて、棚から物がガタガタ落ちてくるし、これは大変だと思っっているうちに家が前の方に潰れてしまったわけです。

当時機屋はたやをやったもんですから、機脚はたしというのがありまして、機脚の方へ寄りかかってしまったんです。外へ出るのは出られたんですが、これは大変だということで外へ飛び出したんですが、とても歩けないですね、道路が波うって、あんな恐ろしいことはもう沢山です。そのうち余震は来るわで……。昔から竹藪へ逃げろといわれておりましたから、幸い屋敷内には竹藪があったんで、そこへ避難したわけです。けれども、とに角長い間のなかで大変な経験でした。

司会 それでは横溝副会長さん、当時十二歳ということで、小学生だったんですが当時の模様をお伺いいたします。

横溝 私は小学校六年であつたと思います。丁度一日ついたちで、いわゆる学校が二学期に入って召集日だったわけです。それでまあ授業もすぐ終ってしまい帰ってきたんです。早めに昼食をとって、明日から学校へ行くんだということで、一生懸命勉強していたんです。そのうち小谷場の方から、いわゆる地鳴りがしてきて、おや何だろうと思っっているうちに、ガタガタと来たわけです。それで私は子供だから奥から飛び出せたんです。お婆さんなんかは出られなくて、やっと庭へ出てきたら転がっちゃったんです。おじいさんがいまして、おじいさんは昔からこういう場合は、大黒柱につかまっていれば大丈夫だと常々いっ

(注) 機脚……機織機械を置く木製の台の意(方言)はたあしがはたしになまった。

ていたんですが、それでおじいさんは、私の妹をかかえて……、私の家も機屋だったんですが、大黒柱の所へふつ飛んでいったのを覚えております。ざっとですが私の場合はこういうことです。

司会 小峰副会長さんも当時十六歳ということで、覚えていらっしやると思いますので一つよろしくお願いいたします。

小峰 確かに私は当時十六歳でした、腕白盛りでして、丁度地震のときは、繩を縋っていたんです。突然シミシと来て揺れるんで、さあ大変だということで外へ出たんです。

ところが、家の中におやじがいたので引っ張り出したんです。出た瞬間、おやじの足の踵へ家が崩れてきたんです。一瞬遅れば助からなかったと思います。そのうちに余震が来て、舟の大波に乗っている気持でした。ふと気が付くと、私は猫が好きで猫を抱いていましたっけ、それから家が潰れたから、さあて本家はどうなっているかとふつ飛んでいったんです、そうしたら本家も潰れちゃっているんです。それから大本家はどうかと行って見ると、これまた大本家も潰れちゃっているんです。それで近所の皆さんが寄っているんです。何で立っているんだろうと思ったら、大本家のお婆あちゃんが中で唸っているわけなんです。私は咄嗟に長い鋸を持って、灯りを照らしながら中へ入っていったんです。そうしたら、梁と梁の間で首を絞められていて唸っていたんです。それから外へ出て、応援を頼み灯りを持ってくれと頼んだんですが誰も行かないので、仕方なく私一人で行って灯りをぶら下げて鋸で梁を切っていました。そうしたらおやじが涙を流して喜びました。お婆ちゃんは腫んだけれど助かりまして、今でも当時の様子が思い出されます。

司会 樋ノ爪の町会長さん、当時十九歳ということですがでしょうか。

平田 その日は丁度筑波山でも行こうかと思つていたんですが、雨が降つていたんで止めたんです。そうこ
うしているうちに、今皆さんがいうようにウォーときて歩けないんです。家は潰れなかつたんですが外
へ出て見ると、丁度池があつたんです、そこは石炭殻せきたんがらで埋めたんです、そこから水が吹き出しているん
です。石炭殻なんぞで埋めるもんじゃないと思ひましたね、それから思い出して西の方へ飛んでいった
んですが、丁度戸田用水を渡つて、星野重造さんの家が二度目の余震で倒れたというんです。それから
さらに行くと、本多孝吉さんの家では、おじいちゃんが見つからないというんです。本多さんの家は継
ぎ足したんですが、新しい方は残つて古い方は倒れてしまつたんです。それから物置も倒れてました。
おじいさんの居るのはその物置だから、皆んなで瓦を剥はいだんですが、タンスがうまい具合にあつて助
かつたんです。

それから本多市太郎さん、本多新一郎さん、本多竹次郎さんとづうつと倒れてましたね、それからさ
らに回つて家へ帰つてみると、前の油屋さん（江口さん）の家が倒れてました。それから裏の竹藪へ陣
取つて休んだんです。

司会 それでは保谷会長さん、当時最年長の二十一歳でしたね、よく覚えていらつしらると思ひますのでよ
ろしくお願いします。

保谷 何しろ二十一歳とはいへ五十年経つてゐることなので、明確にはお話し出さるかどうか疑問ですが、
私は丁度その時歯が悪くて浦和の歯医者へ行く予定でした。雨が降つていたので出られないので、牛の
草鞋わらじ作りをしていたんです。それで歯医者へ行くんで、早く食事の用意をしてくれといつて、風呂を沸
かしてもらつていたんです。それから朝食を食べていたんですが食べ終らぬうちに、皆さんと同じよう

にドカツと来てしまつたんです。外へ飛び出す暇もなく、納屋は大神樂式だいがくしきになつてまして、腕うでに崩れて落ちてきたんです。間一髪助かりました。私はその時、昼を早くしてもらつたんで助かつたなと思ひました。私は外へ飛び出しましたが、年寄が中に入つていてというので、助けようと思つても瓦がおちてくるし、なかなか中へ入れなかつたが、夢中で飛込みおじいさんとお婆さんを助け出しました。今冷静に考えてみると、地震の来る前には何か嵐のような音がしたですね。とに角大変恐かつたです。

司会 小林さんいかがですか、木崎で生れてこちらへ嫁よめいできたそうですが、当時三十四歳ということでお子さんも六人いらしていたそうですがその時どうでした。

小林 私のところではお父さんが丁度家にいなかつたんです。子供と私とでお昼の支度をしていたんです。そうしたところ地震が始まつたでしょう、だから子供等皆んなに抱きつかれちゃつて歩くことが出来なかつたんです。そうしているとお父さんが帰つて来て、ああ助かつたなと思ひました。お父さんは子供をこつちへ寄せといつたんで渡したんですが、子供は蟹かにのように這はつて庭の松の木まで行きました。つけ……それから一人一番下の子供が足りないの心配していましたが、不断地震の時は藪へ逃げると話していたんで、竹藪へ行つていたんです。家では母屋と物置が潰れてしまいました。しばらくして柳崎の長英さんと、井沼方の金ちゃんが丁度地藏様の所を通つたんです。自転車で走れなかつたそうです。それから今度はすごい埃ほこりが立つたんです。まあ今考えるとその時家が潰れたのかも知れませんか。

司会 金子さんは、当時六歳でこのなかでは最年少になるわけですが、もし覚えていたことがありましたらお話しいただきたいと思ひます。

金子 その当時、私は小学校一年生でした。当時は早番と遅番がありまして、早番でございました。たまたま

ま近所の子供と三人で田圃たんぼの用水で魚取りをしていたんです。そうしたら体に変な感じを受けて……。

そのうち水が波打ってきましてね、馬穴はコロコロ転がってしましまして泣きながら家へ、そうですね三百メートル位ありましたかね、辿たどりつきました。その当時は草葺きともう一つは染工場がありましたね、煙突があつたんです。たまたま二度目の揺れで家が倒れましたが、もう一つ恐かったのは煙突でした。煙突というのはどっちへ倒れるかわからないんです。途中で倒れましたけれどほんとに恐かったですね。

司会 それでは芝地区社協の矢作会長さんに当時の様子をお話しただきたいと思えます。

矢作 私は当時上野駅の二十一歳の改札係で社会人でした。十一時ちょっと過ぎに食事をして小休止していると、グラグラッと来たわけです。それで暫くして街の方を見ると、火の手があがつて来ました。私の親戚も浅草の小島町にあつたので、一応どんな状態かと思つて見に行つたところが、その時は別に差支えはないだろうと思つて帰つてきたんです。それで私は駅へ帰つて来て、丁度駅へ帰つてきたら赤羽の鉄橋が壊されたというんで、列車は赤羽までしか行かなかつたんでしよう、赤羽と上野間を間引き運転をしていたようです。三時頃私は上野から赤羽まで参りまして、降りて鉄橋を渡つたんですが、やはり橋桁はしげたが崩れたり横になつたりしたのがありました。それから川口駅へ出て、さらに今でいう西川口駅周辺まで歩いてきたんですが、相当数の家が倒れているんですね。そこで私の家はぼろ家ですから、まず倒れているだろうと思つてましたら案の定半壊です。家へ着いたのが五時頃だったでしょうか、それで竹藪へ蚊帳かやを吊つて寝ました。

司会 それでは次に女性を代表いたしました、松波民生委員さんいかがでしょう。

松波 私は当時十六歳で体験した所は熊谷でした。花も恥じらう女学生でした。始業式の日だったので、早めに家へ帰って丁度食事どきでもあったので、さあ昼の食器を並べようとしたらグラグラと来たわけなんです。いつもさほど大きい地震が来たことがないから安心していましたが、だんだん揺れが激しくなってきました……。当時大きな水瓶が沢山ありまして、その水がぼちゃぼちゃ揺れ出して外へこぼれそうなんです。棚からは軽い物が落ちてくるわけで、これは大変だわと思ひ、歩くのが大変だったんですがどうやら外へ逃げ出しました。当時幸ひ火災もなく、倒れた家も怪我人もいなかったようです。夜になりまして熊谷に桜堤というのがあって、そこから東の方へ何かソフトクリームの様な雲が出たんですね、そのうちそれは吹上の方が火災なんだというんで、消防車が出たんですが、鴻巣だというんで鴻巣へ行ったら北本だというんです。北本へ行ったら大宮だというんで消防車は帰って来ちゃったというんです。後で聞きましたら、それは東京が燃えているんだということでした。とに角すごかったですね。

小峰 家の前が田んぼでクワイを作っておりましたが、地震で洗われちゃってみんな上に浮いちゃってましたね。

小泉 あの時垣根がふっ飛んでましたね、いかに揺れが激しかったか今でもぞおつとしますよ。

司会 ただ今出席いただいた方々にそれぞれお聞きいたしましたがお話しのなかに昼食事で午前十一時五十分というものであったと言いますが、そのとき芝地区では火災が無かったようですね、火は本当に出なかったんでしょうか。

小泉 実は当時お湯を沸かすのに釜屋で藁わを燃やしていたんです。地震のときは大きい鉄瓶を引っくり返し

て出てきたんでよかったです、なかにはやっぱり釜屋から火が出て大騒ぎして消し止めたという家もあつたということです。

司会 建物については皆さんのお話しでもわかりましたが、相当倒れたようですね。数字としては百三十二棟で全戸数五五九棟のうち二十三・六パーセントの多きに達しております。また半壊についても九五棟で十七パーセントになり、併せて何等かの被害を受けたものを含めると相当数になると思います。この地震では、余震も当日だけで百十四回を数え余震で倒れた家も随分あつたようですが、そこで余震について特にお話しすることがありましたらお伺いしたいと思います。

平田 余震というのは本来、本震よりも大きいのは来ないといわれておりますが、あの時は余震のなかにも本震のような揺れも結構あつたように記憶しております。ただ気持が不安だったため、実際はそうでなくともそう感じたのかも知れません。

司会 そうした状態では、一体余震の最中皆さん方寝られなかったと思いますが、どこで寝たんでしょうか。

今泉 私の家では二、三日は庭へ蚊帳を吊つたんですが、雨が降って来たんで家の中で寝ました。

保谷 私の家では表に十日も寝ましたよ、母屋が潰れるばかりになってましたからね。雨は私の家の方ではパラパラ程度でしたので助かりました。

横溝 あの時マグニチュード七・九でしょう、とに角だいたい震度六ぐらいの余震が時々来ましたが、そういうわけで三日も四日も家の中へ入れなかつたんです。

保谷 余震のなかでは、翌年の一月十五日のものが大きかったですね、これはすごかったですよ。

(注) かまど 釜屋……かまどを備えてあるところ、もしくはその建物。

司会 表に寝たといっても余震の続く最中ではそれは大変でしたでしょうね。

小泉 私のところでは、竹山へ蚊帳を吊って寝ました。

横溝 蓆むしろも敷いて蚊帳を吊って、草枕で寝ました。

保谷 当時はどの家にも藁わらが沢山あったから、その藁わらを敷いて寝ました。今は藁わらがないから困ったものですね。

司会 それではこれから私の方から適宜お伺いいたしますので、その時はどうであつたかお聞かせいただけますかと思ひます。よく地震では地割れということが大きく問題になりますが、当時の芝村ではどうだつたでしょうか。

横溝 多少ありましたけれど、それもあまり大きいのは無かったですね。

小泉 当時は舗装をしていなかったせいか、あまり大きいのはありませんでした。

司会 それでは、次に揺れている最中は歩けないというお話でしたが、本当に歩けなかったのでしょうか。そりゃあ歩けるもんではありませんという声あり。

ではまたお伺いしますが、昔からよく地震のとき竹藪へ逃げろといわれていますが、先程小林さんのお子さんが竹藪で助かったとお聞きしました。本当に竹藪は安全なんでしょうか。

小峰 安全ということは竹藪は根が張っているでしょう、だから安全ということつまり地割れがないということ、私の場合三日間竹藪に寝ました。

司会 今ですと竹藪が無くなりましたので困りましたね。

小泉 とに角安政の大地震のとき竹藪が一番安全だったということ、そのようにいわれているんですね、実

績があるわけですよ。

横溝 竹は網の目に根を張ってますし、竹は絶対に折れて倒れることが無いので安全だということでしょうね。

保谷 地割れは一回割れると、それがまた縮むといわれておりますが、そういうことは無かったですね、従って地割れにはまっておしつぶされて死ぬということは無かったですね。

司会 それでは話をかえて、震災中の食事等ほどのようなものだったのでしょいかお伺いしたいと思います。

矢作 御飯を焚いて食べたんですがほとんどおにぎりでした。

司会 水の問題はどうだったんでしょうか、現在ですと水道管が破裂して水が出なくなってしまうと思うんです。しかし当時は掘井戸でしょうから、井戸水は大丈夫だったと思いますけどどうだったのでしょうか。

横溝 井戸の水が止ったという話しは聞かなかつたですね。(当時は地下水が今と違って豊富である。)

今泉 家あたりは東京方面から線路伝いに大勢の人が逃れてきましたが、その人達に井戸水を随分と分けて

やりました。

司会 お話しのように関東大震災は非常に大きい地震でしたが、地震が来る前に皆さん方の中で、何か直感的に感ずるものがあつたでしょうか。

平田 今考えると二十十日の関係で、あの日は異状に温度が高く暑かつたですね、何だかむかむかして変だつたですよ。

小林 当日は朝から風みたいに変な天候だったですよ。

司会 つぎに防火についてお話をすすめてみたいと思うんですが、先程来のお話しで立って歩けないという

ことがわかりました。そういう状態で火を消すなんてことは出来るもんでしょうか。

小泉 釜屋というのはどこの家でも土壁だから、割合に心配がなかったんですが、最近は新建材も多く使われておりますし、ガスも使っておりますので余程消すということに注意しないといけないと思いますね。

司会 火を発見してもその状態では消すことは無理だということになりますか。

保谷 それでも私の裏の小杉さんの家では、お昼の仕度で食べたのが早かったけれども、当然釜屋では火を起していたんです。ご承知のように釜屋は天井が高かったので、すすだらけになって消しましたね。家でもやはりおばあさんの姉さまが真黒になって釜屋から出てきたそうです。心が次第では初期消火的な動きはできると思いますね。

司会 ここでちよつとお聞きしたいんですが、今、市でも避難袋を町会に斡旋しておりますが、皆さん地震の瞬間何を持って逃げたでしょうか、果して避難袋が持ち出せるかどうか、皆さん方の中で、当時何を持って外へ逃げたかお聞かせいただきたいと思います。

今泉 うちではだれも表へ飛び出さなかったです。

小泉 実のところ表へ飛び出すとき何も持たなかったですね。

小峰 やっぱり同じに何も持たなかったですよ。

司会 今のお話してほかの方達も、皆さんやはり何も持たずに外へ出たようですね、その時何を考えていたかお聞かせいただきたいと思います。

小峰 地震の瞬間は何も考えなかったし、考える余裕がなかったですよ。

(大多数が同意見であり、逃げるのに精一杯であった。)

司会 では、避難袋を置く場所を余程考えないといけませんね。早い話しが家の中に仕舞い込んでいたら何もならないですね。

保谷 今ここにいらつしやる方々の家は回りが十分空地がある方々ですからいいですけど、最近はその間に空地に余裕が持てないので、そのような形での避難対策はまた違ってくると思います。ですから避難袋は是非用意してもらって、いざというときには少くともそれだけは持つて表へ飛び出す、そうでもしないと火災が起き皆んな燃えてしまったらその日の食事にも困るということを知ることがあると思います。

司会 やはり避難袋は中に詰めるものを十分検討し、用意しておいた方がよいということになるわけですね。

平田 その時は持ち出せなくとも、本震が治まってから後で出すことも出来ますからね。

司会 皆さん方の体験的なお話から、今後の地震対策をどうしようか、どうあるべきか、ということと締括りをしたいと思います。

それから参考にお聞きしたいと思いますですが、よく気象庁等ではいっていますが、地震の起る前にナマズや魚等が騒ぐといわれていますが、その例は見たか聞いたことがありますか。

小峰 この間奈良の市長が、空の雲の様子を見て地震雲が出たといいましたが、やはり地震の前には何か前兆があるのでしょうか。

司会 当時芝では幸い火災は無かったし、平家の家が多かったので潰れる程度ですんだんですけれど……今

大地震が来るとすると二階家が多いし、また建てこんだ住宅が多いので火災による被害も相当に出るんではないでしょうか。消火といったサイドからどうあるべきか、お考えがありましたらお聞かせ願います。

金子 住民の生命と財産を預かる消防の立場からいいますと、一斉に火災が発生した場合、現在は芝に三分の分署がありますけれども、道路が寸断され、ポンプ車が十分活動出来ない状況になることが目に見えております。水も、つまり水道も止まるし……そうなるかと現在は用水も無いし、一体水をどう確保するか、どう処置するかということになると思います。私個人の考えですが、やはり昔のように隣組とかの力で何とかしなければ、……消防の力だけではどうにもならないと思います。私達の街を地震災害からどのように守るか、それにはどうしたらよいかということになるうと思えますが、その第一はいかにして火災を出さないか、という言葉に尽きると思います。

司会 先程、今泉会長さんから棚から物が随分落ちたというお話しをお聞きいたしました。果たして地震のとき外へ飛び出るのがよいかどうか、その辺についてお話しをいただきたいと思えます。

保谷 昔の瓦は銅葺ですから意外としっかりしていたけれども、今のはただ引掛けてあるので大変弱いんじゃないですか。

金子 地震の時はどうするかとひととおりあげられていますけれど、やはり地震の時は無意識に表へ出たくなるんじゃないですか。

小泉 余程訓練していれば別ですけど、やはり人情として出たくなるんじゃないですか。ただ一概に外へ飛び出るとは怪我のもとになるんじゃないでしょうか、会長さんのお宅のように確しかりしたものや潜

るところがあれば別ですけど……。

司会

今話しを進めているなかにおいて倒れた家が多いんですが、当然建て直しをしたと思うんですね。しかし大工さんなんかそんなにいないわけですので、倒れてからの位で家を建て直しをしたのか、その辺をお聞かせ下さい。

矢作

私の家では、幸い実兄が大工でしたからすぐというわけにはいかなかったんですが、翌年の一月に棟上げをしました。

小泉

家は祖父が家を建て替えるつもりで櫓を三十年ばかり寝かしてあったんです、だから翌年建てました。当時は田舎から手伝いに相当きました。俄か大工、つまり地震大工も多かったようですね。

横溝

私のところは幸い倒れなかったんですが、大分曲がちゃいましてね。三室の消防団が半天を着て筋交いを打ったり、親切に手伝ってくれてね、壁等は自分のところでやったと思います。

保谷

大正十二年の震災後十三年、十四年、昭和元年から三年まではよかったです、四年から大変不景気が来たんですね。

小泉

そうですねあれは確か昭和四年ですね、大工さんは仕事が無くて……それで長徳寺の庫裡くらりを建ててるのにお金が無いというんでやったんですが、当時一円だったんです。今考えると随分安かったですよ。

保谷

大正十三年から昭和元年の二年くらいで家の建て直しは終っちゃったんですね。

平田

その時に低利資金というのを個人に貸したんですよ、仮りに千円借りてね、返す時には一反歩も売ればいいじゃないかといっていたところ、返す時になって土地が下落しちゃってね、三反歩売ったんですよ、それで皆んな建ったんです。

小泉 うちの方で借りた人がいて、その人は現在の自分の家を建てるのに二反歩売ったそうです。二反歩売ったんじゃ金が余っちゃうというんで一反歩売った人もいました。

司会 当時地震が来たとき、皆さんのお住いは相当広い庭があったようで、従って避難場所という問題は無かったと思います。しかし、今はご承知のように家が密集してきて退避場所も無い有様で、今大きな地震が来たら一体どこへ逃げたらよいのか見当もつかないと思います。その辺はいかがでしょうか。

金子 現在グリーンセンターとか……小学校とかが避難場所といえますけれども、実際震度七以上が来た場合そこまで行けないと思いますよ、一応本震が治まってからそこへ避難するわけですが、実際地震が来た場合の退避場所は、町会等でどこか決めておく必要があるんじゃないでしょうか。

小泉 避難場所というけれど地震が終ってから避難するんで、揺れている最中はしっかりした台、つまり卓袱台ぶだいとかにもぐっているのが一番安全じゃないでしょうか、それから避難の必要があれば避難場所へ避難するということになるんじゃないでしょうか。

横溝 そうですね、揺れてる最中に避難するっていったって出来っこないですよ。

保谷 一番先に考えられることは、食器棚が一番危険ではないでしょうか。

横溝 こういうことも考えられますね、つまり家の中に一ヶ所しっかりした場所をつくって置く必要があるでしょうね。

司会 現在では家の中にそのような安全な場所といっても、なかなか難しいと思いますので、しっかりした物を置いていて咄嗟とつさにそこにもぐるといふことも一つの方法だと思います。また、昔はそのような場合隣り組等でお互いに助け合いましたが、現在ののように芝の人口も八万三千余となり状況は大分違ってき

ていると思います。わたし達の地区では、特別に震災対策推進協議会が出来て、各町会の自主防災組織が進められてきており、さらには自分の家は自分で守るといふ方向で今後は進んでいかなければなりません。このPRはどのようにしていったらよろしいかお伺いします。

小泉 折角対策協議会というのが出来たことですから、町会のそのような会議、座談会には協議会の役員の人達も積極的に出席してPRすることも必要ではないでしょうか。昔のような隣り組の助け合い精神を大いにPRすべきでしょうね。

司会 現在と当時の芝村とは状況が大分違いますが、あの時の体験から、地震対策はまずどうあるべきかについてお話しを伺いたいと思います。

小峰 その当時は当然のこととして、自分達で何の考えもなく進んでやりましたよ。

今泉 さっき横溝さんからお話ししましたが、三室の方の消防団が応援して壊れた家を一軒一軒無償で直してくれたそうですね。今では当時と事情が違いますので……。

横溝 さっき小峰さんからお話しがありました。家の下敷きになっている人をどのように助けるか、方法を十分考えておかないといけないですね、私の方も下敷きになった人が一人おりまして、助けるといって瓦屋根だから持ちあがらないわけです。仕方がないので鋸を持ち出して切って助け出しました。

平田 そのような事態のときには、助けを近所に求めれば飛んできて手伝ってくれると思いますよ。

松波 まず地震が来たら、火の元を切る習慣をつけたいもたらうことが一番ですね。万一ガスに火がついていた場合地震が大きくなるか、小さくて終るか様子を見てから消すというのではなく、地震が来たら何が何でもすぐ火を消すことが結局は自分達の命を助けることになると思います。従ってそういう訓練が

必要だと思いますね。

横溝 一番大事なことはやはり水だと思います。先程お話しが出たように水は止ってしまいますし、どうい
う方法で水を確保するか、各家庭にPRしてほしいと思います。一週間たったら取り替えろとか、具体
的に指導して欲しいですね。

平田 まず食糧の問題でしょうね、当時そら米を買わなければならぬといったとき、お米屋さんでは実際
二俵しか売らないんです。今みたいに米が余っている時はトラックで来るかも知れませんが無い時分
ですから一番困ったですね。

小泉 一番肝心なことは、地震に備えて先ず家の中にしつかりした台や、安全な場所を備えといて、とに角地
震がきたらそこを一担避難すること、次に火事が大変ですから火の始末、次に食糧の問題など順を追っ
てやるべきでそのことを住民に働きかけをすべきですね。

金子 今月一日防災の日というのがありましたですね、テレビやラジオでよく出てきますので、一般の家庭
ではわかってもらっていると思います。

おそらくどの家庭でも水の問題、食糧の問題が地震対策として大切だということはみんな知っている
と思うんです。地震が来たら大変だなあと思うけれども、それをいかに実際の行動に移してもらうかが
大変な問題だと思います。その一つとして私の立場としては、やはり火を消すという動作が一番だと思
います。

小峰 まず自主防災が第一ですね、家庭に始まって、町会組織と町会内で常にそのような話し合いの場をつ
くって自分達で考えて行く姿勢が大切であり、特にそのなかで消火器の設置が重要ではないでしょうか。

松波 災害が起きるといふことになる、人の心といふのは不安におちいると思います。そのようななかで

情報を正しくとらえて理解し、次の行動に移るといふことに対する方策はないものでしょうか。

金子 たしかに地震の予告といふことが政府で発表しましたけれど、新しい制度の中で取り入れられようとしており、これは運用面で非常に大きな問題があると思いますね。

保谷 地震対策というのは確かに難かしいと思いますね、考えれば考えるほど難かしくなってきましたね。幸いここにいらつしやる方々の家の周辺は比較的空いており安全と思われませんが、そうでなく密集地域にお住いの方々に特にPRし、仮に十軒の家で一軒でも火災になれば全部やられてしまふんだといふことをよく周知し、火災対策に重点を置くべきでしょうね、そういうなかで昔の隣組ではありませんが、協調精神を養うよう心掛けるべきではないでしょうか。

矢作 水、食糧が一番大切でしょうか、水対策としては地盤沈下の問題がありますけれど、井戸を掘っておく方法も考えられると思います。掘っておいても、ふだん水を使わなければ地盤沈下の影響は出ないと思います。

今泉 皆さんから話しがでて震災対策推進協議会ができたことですから、避難方法、場所等を定めて先ず訓練をすることが必要でしょうね。市だつて地震の最中じゃすぐ動けないでしょうから、それから常時^{かたん}から各家庭において水、食糧を用意しておく等今後具体的に事業を進めていく必要があるうと思います。

司会 色々と具体的なお話しが生まれて、今後震災対策推進協議会としての方向づけもなされどれをとつても非常に大切なことばかりだと思えます。これを糧に今後の事業の参考として参りたいと思えます。それでは行政面では一体地震に対する対策と申しましようか考え方について、並木芝支所長さんからお話

しをいただきたいと思います。

並木 市では、災害の発生に対処し、いつでも活動ができるように体制は整えられています。

それぞれのセクションで、食糧の調達とか配給、災害の復旧、羅災者の救護など、いざというときに職員はどの仕事をどう分担するかということ組織づくりができています。しかし先程、皆さんからいろいろお話しも出しましたが、やはりこうした過密に近いところで地震が発生したような場合、いくら市の方で体制をもつていても、すぐに対応していくということには困難があります。

いま、現実に地震が発生したとなりますと、まずはそれぞれ個々の力で災害を大きくしないよう行動を起こしてもらう必要があります。それをしないと第一に、自身が危険にさらされるということになるわけです。市の救助に頼ってみても、ガタガタ揺れている最中にはどうにもなりません。

勿論、地震発生と同時に、市は広報無線網を通じて避難誘導や、市民の皆さんが今後どのように行動すべきか、といったことを一般的に放送し、混乱の防止につとめるわけですが、実際は、地域ごと、あるいは家庭によって災害の起きる状態は違うわけですから、その情報をもとに、自分は何をしたらよいかを考えなければなりません。こうしたことは、地震が起きてから考えたのでは十分ではありません。

実際にふだんから、それぞれの家庭におきまして、生活の場を通じて話し合いの機会を十分に持つていただきたいと思います。震災の恐しさ、自動車を含めて交通がどうなるかとか、ガスが止まる、水道が止まるという状態の中で、当面、家族のうち、だれがどうその役割りを分担し、どう行動するかといったことについて真剣に考えて貰う必要があると思うんです。

市の方でも、災害対策は真剣に進めてはいますが、市民の方も一生懸命になって、今すぐ実行しなけ

ればならないこと、災害が起きたらどう対処するといったことについての方策をつくっていただきたいたいというのがお願いです。

司会

事務局の永瀬さん、前に災害対策関係のお仕事をやっておられたということで、消防の横の連絡といった点も併せ市の災害行政面についてお話ししていただきたいと思えます。

永瀬

私は三年ばかり災害連絡室で地震対策を担当いたしましたでしたが、この部門は奥に入れば入るほど非常に難かしく頭が痛くなる問題が多いわけです。と申しますのは市民の皆さま方の感覚としては、いつ来るかわからない地震対策よりも、今日の今の生活の方が大切だという考え方が圧倒的に多いわけです。その辺でどうPRしていったらいいのか悩んだわけですが、それはそれといたしましていつか必ず来るであろう大地震に対して、行政としてやはり考えておかなくてはならないわけです。行政サイドで考えなくてはならない地震対策としては、まずその出来る範囲はどこまであるのかということについて考えることになろうと思えます。

そこで実際に大地震が発生したとき、実際に行政が体制として順調に動き出せるのは諸般の情勢を考えますと最悪の場合三日後ぐらいになるのではなからうかと思えます。ですからそんな場合三日までの間、皆様方にどうしてもお願いをするということになるわけです。で先程色々お話しができましたが、自分達で火を出さないとか、生活を支えるとか水をどうするとかのそういうことは、当面自分達で自分達の面倒をみなければならぬという形で考えて欲しいということなんです。

ある時間が経過したらそれじゃその後の対策はどうなっているかということですけど、少なくとも川口の四十万になろうとする人口に見合う応急食糧は備蓄してございます。これは広域行政のなかの震

災対策専門部会の事業として、農協等の倉庫に保管してございます。水については水道部の方で貯水、配水方法等技術的な面その他で検討されており、充分間に合う方策を講じておるようでございます。またもう一点は近隣市町村との応援協定もできるようでございますし、いざという時のために自衛隊も当然万全の方策を講じているようでございます。一方県の方でも地震対策に積極的に取り組んでいるようですけれども、しかし何と申しましても地震対策はお金がかかることでございますし、いつくるかわからないものに莫大な投資をするのが果たして市民の利益になるのかどうか、その辺が非常に難かしいわけですけれども、無為無策ではおれないわけですし、市民の生命と財産を守るといふ観点から、また特に大野市長さんが理解がありまして何とかしなければいかんということで、その表れが今回の避難袋の助成頒布ということになったと思います。

従いまして行政の救助（護）活動が軌道に乗るまでは、めいめいの家庭において災害の対策に真剣に取り組んでもらおうと、今回の避難袋はこのよりどころとしてほしいという意図も含まれておりますので購入についてのPRをよろしくお願いいたします。

司会 大地震における一番の問題は二次災害である火災だと思えます。この火災に對しいかに対処するか、消防サイドで対策についてお話しをお伺いいたします。

金子 私達は先程も申しておりますように人命と財産を守る使命を帯びておりまして、家庭にどんなことがあっても団員は出動するということになっております。現在芝地区では四十名の定員のところ三名欠で三十七名です。分署はご承知のように三つあり署員は七十名ぐらいになります。このような体制で、はたして大地震のとき完全に防災活動が遂行できるかということについて懸念しているわけです。私達も

万全を期してやりますけれども、まず自衛をしていただきたいということです。

司会 本日は大変有意義なお話しをお伺いし大変有難うございました。あらかたのご意見も出つくしたと思
いますのでこの辺で芝地区震災対策推進協議会の会長さんから一言、締めとしてお話しを頂戴したいと
思います。

今泉 大変貴重なお話しをいただきまして立派な座談会でありましたことを感謝いたします。何と申しま
しても天災は防ぐことは出来ませんが、それを人力によって少しでも軽くすることは出来ると思
います。従いましてこの震災対策推進協議会といたしましても、そのような努力をほらい災害を最少限度
に食い止めるよう皆さま方のご協力をお願いいたします。

いつくるか判りませんが、来たときに芝地区に震災対策推進協議会が出来てよかつたと思
われるよう私もがんばりたいと思います。具体的には今後各町会ごとに自主防災組織を作っていまし
て、実のあるものにしていききたいと思っております。関係の皆様方にも何分のご協力をお願いいたしま
す。

今日は本当にご苦勞様でした。



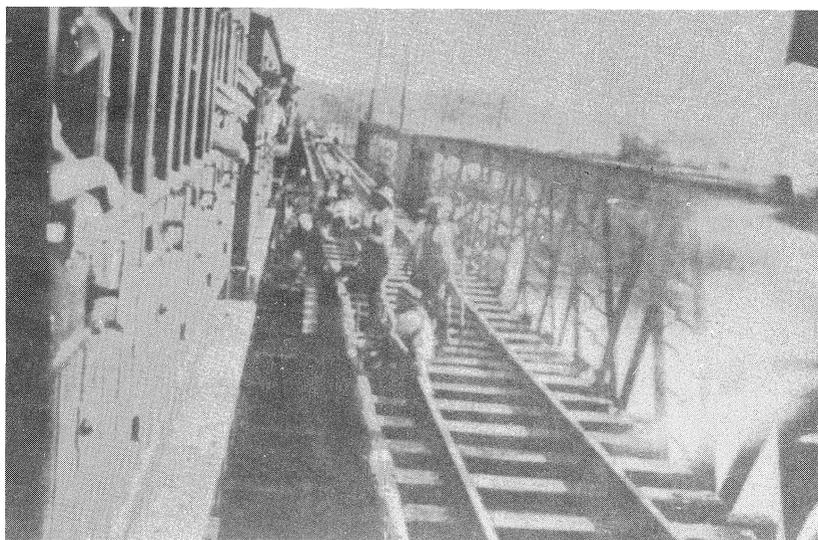
関東大震災川口町での記録



寿町通りの惨状



本町1丁目赤羽街道出入口(手前立っているのは郵便局女子事務員の避難者)
写真は仁田仁夫氏(春日部市大枝56)のご好意により掲載させていただきました。



一時危険に頻した赤羽鉄橋は工兵隊や多数工夫の応急修理と一時間5哩の最除行とで辛うじて東北信越から関西方面への連絡をとった。



川口町駅下りホーム上屋根倒潰



川口小学校 2 棟倒潰



金山町 1 丁目附近



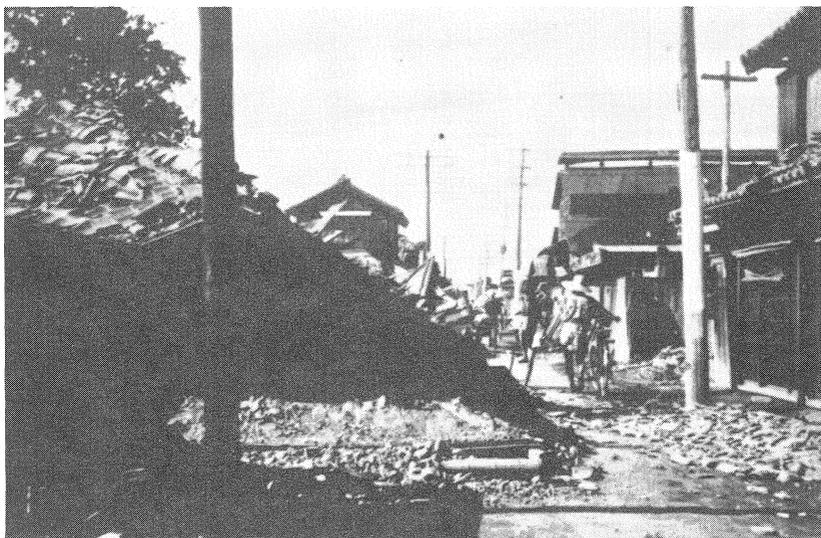
栄町1丁目沼口商店より



栄町2丁目岩田工場附近



柳田医院前通り



寿町通り牛山工場附近



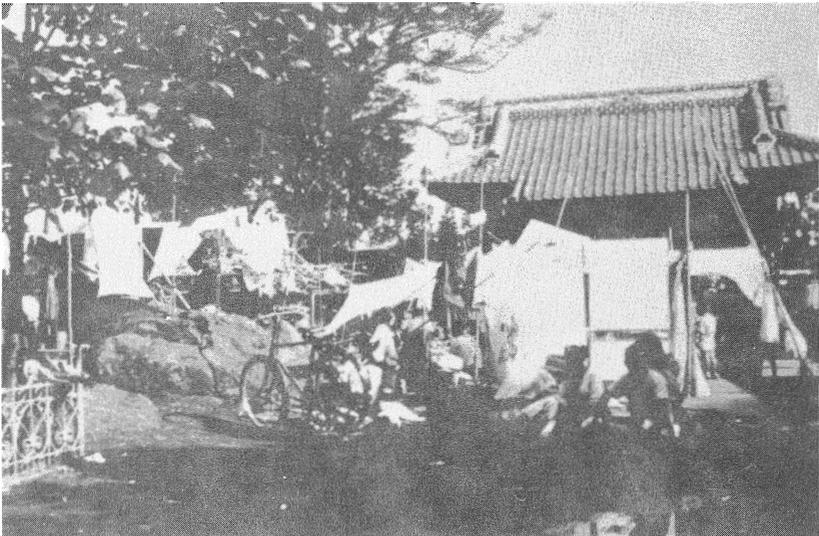
田原工場の惨害



平野工場の惨状



卓三館で救助米の配布



川口神社境内での避難風景



2日朝、川口町駅前



桃林堂薬局前避難風景

関東大震災体験記 (目次)

(受付順)

今猶頭より離れない……………	峰町町会・峰寿会	小泉増吉……………	48
川の水が盛り上り底が見えた……………	宮根町会・宮根ことぶき会	横溝藤一郎……………	49
「ズシーン」と下から突き上げられる……………	上谷町会・上谷長生会	伊集院秀盛……………	51
都電を手で押した……………	樋ノ瓜町会・樋ノ瓜長生会	金子章衛……………	53
顔面が仏様……………	芝新町町会・新町明和会	原 伝蔵……………	55
新築で潰れなかった……………	芝新町町会・新町明和会	田原多四郎……………	56
東京の火の粉が飛んできた……………	鶴ヶ丸町会・鶴亀会	河井万蔵……………	57
事業の大転換……………	小谷場町会・小谷場高砂クラブ	松井元子……………	58
人間が家から押し出された……………	小谷場町会・小谷場高砂クラブ	清水のぶ……………	60
一瞬命拾い……………	塚越町会・青葉会	保谷忠太郎……………	61
物価の値上り四倍に……………	塚越町会・青葉会	石川喜代……………	63
手打ちうどんを作ろう……………	塚原町会・塚原長寿会	松本金蔵……………	65

コンロを持って避難	塚原町会・塚原長寿会	須賀竹松	66
震災前夜の真赤な月	神戸町会・八千代会	相原 正	67
子供を両手に引いたまま	神戸町会・八千代会	石原たみ	68
一パイのビールに酔う	芝富士町会・芝富士さつき会	弓場政吉	70
電気がついて生き返った	芝富士町会・芝富士さつき会	小宮ゆき	72
この世の終り	芝二丁目町会・芝二福寿会	木村力之助	74
トラックの荷台に乗って砂利道を八十キロ	辻町会・敬和会	平田忠直	78
巾一尺の地割れ	辻町会・敬和会	深沢雄八	81
阿鼻叫喚の巷	柳崎町会・柳崎寿会	並木利夫	83



今猶頭より離れない

峰町町会 峰寿会

小泉 増吉

余り大きな地震を経験しない私は何時もある地震くらいと思って丁度昼時でもあり、家の中に居ったが、何か異様な地鳴と共に大きく上下や左右に揺れ動きました。家の軋む音も激しく、棚の物がばたばた落ちて、これは大変と思っっているうちに、自宅の建物の前側が半倒潰したのに驚き、少しの隙間より脱出し庭に出たのであるが、とても歩く事等出来ず転倒して只蹲るばかりでした。何しろ何十回と云う程大きな余震があり、とても家の中に入る事など出来ない状態でした。夜は、裏の竹山に蚊帳を吊り一週間くらいはこの竹山居住でした。翌日は、家屋の倒潰梁に潰された死傷者や、或は種々の災害のニュースが入り、特に夜は東京の空が不夜城の如く真赤に炎上し、その被害の甚大さは目を見張るばかりでした。

今から半世紀以上も経過し細かい事は思い出せないが、只恐しい事と被害の甚大であった事は今猶頭より離れない。現在関東大震災より五十九年経過し昔から六十年目毎に大きな地震が起ると云う云い伝えがあり、今新聞紙上やテレビ或は各行政機関においても大地震近しとの報道もあり、色々その準備対策に万全の方策を講ぜられております。

当芝地区においても、他に先駆け震災対策推進協議会を発足し、その活動の手始めとして八月三十日―九月二日の間に起震車により震度四―六迄の体験者大会を実施し、今後震災体験者より参考資料を集め、防災講

座又は町会毎に避難の訓練等を行い、自主防災の組織作りなどを計り不幸にも大地震発生の際は、その被害を最少限度に喰い止めるべくまた防災意識の高揚を図るべく着々と準備を進めておられることは誠に時期を得た処置としてよろこばしいことであります。

川の水が盛り上り底が見えた



宮根町会 宮根ことぶき会
横 溝 藤一郎

大正十二年九月一日、夏休みも終り二学期の始り「夏休みの友」を持って登校の日であった。全校児童に對し校長先生のお話があり、教室に入り担任の先生の注意事項等を聞き十一時頃帰宅した。何か其の日は、午前中驟雨しゅううがあり上つてからも特に暑かった。今思えば三十度以上もあつたらうか。其の日に限つて昼食も早目で十一時半頃であつた。

いよいよ明日から二学期だ、予習をしなければと机に向つて間もなく、西の方より異様な地鳴が聞えて来たと思つたら「地震だ」而も大地震だ、段々大きくなる。急いで庭に飛出す祖母も出て来たと思つたとたん立つて居られず転がつて居た。やがて庇が落ちるといふ始末、こんな大きな地震は初めてだ「マグニチュード七・九」と後で判つた。

私の家は織屋であつたので、祖父は妹等をつれて織機と大黒柱もくしゅうの基に座り込んで居たようだ。工場が半分

倒壊し母家もだいぶ傾いた。父は丸太で家が倒れぬよう支え棒をした。余震が度々来るので急いで使用人等と共に、裏の竹林に入った。近所の家で、子供が家の下敷になったと云うので父が鋸を持って急いで出掛け、それに続いて私も行って見た。

近所の人達が多勢来ており、倒壊した家をやつとの思いで持ち上げて女の子を引き出した。幸いたしいた怪我も無く安心した。あとで聞いた話のだが、其の大地震の時に、友人が釣をして居たそうである。揺れる度に川の水が山のように盛り上って、川底が見えたそう、その水が通路に魚と共に打上げられたとこのことであつた。

午後三時頃、南の方つまり東京方面に、もくもくと入道雲が昇っているのが見えた。その後空が真赤に染つた。後で判つたことだが東京は大火で大変多くの人が死んだという。

夜は、庭に^{むしろ}藁や板を敷き蚊張を吊つて寝た。

翌日芝小学校に行つて見た。今は記憶が薄れたが、東側に瓦葺き平家建の六年生の教室が倒れていた。学校が長徳寺、慈星院に分散し授業が始つたのは一ヶ月後くらいであらうか。

まだまだ予震が度々あり、近所でも多くの家が倒れている。子供心に何とも暗い気持であつた。然し井戸水は何処も出た。火災も起らなかつたのは誠に不幸中の幸であつた。

三日か四日頃であつたらうか、蕨の踏切まで行つて見た。赤羽川口間の鉄橋が曲つたのか、一部故障か東京で震災にあつた人びとが、赤羽の鉄橋を歩いて川口に渡つて列車に乗り、故郷に帰るのであらう、客車といわず貨車機関車の上まで人、人の山である。駅の歩道橋に人の頭がぶつかりそう、のろのろと動いている今にも停りそう。

そうした混乱の中にも、奇徳な人がいて土地の人であろうか、羅災した多勢の人びとに、食物を与えていた。困る時は、お互に助け合うものだとの奥に深く感じ取った。

十日ぐらい過ぎた頃、三室消防組（現在は浦和市）の方々が、傾いた家を起しに、弁当持参で応援に来てくれた事は実に嬉しかった。やはり近隣は大切にすべきであると思った。

災害に備えるためには、近隣の連携、避難誘導に対する責任者の選定と種々あろうが、常時の計画的な訓練が必要ではなからうかと考える。何が何んでも火を出さぬこと、火のものと用の用心、ガスの基栓を締めることが肝要であると思う。



「ズシーン」と下から突き上げられる

上谷町会 上谷長生会

伊集院 秀 盛

大正十二年九月一日関東大地震に出会ったのは、私とその春上京して大森の叔父の家で世話になりながら勉強していたころ、たまたま紹介する人があって丸の内にあった製紙会社にアルバイトで働いていた時でした。地震が発生した午前十一時五十八分には二階の食堂に入ってまもなく、ズシーンと下から突き上げられるような音とともに激しくゆれだした瞬間にこれはただごとでないという驚ろきと恐怖に夢中で階段を転ろげおちるように外にとび出しました。道路は激しい地震のため地割れがところどころに見え、余震は数分お

きに続いており、道路はまたたく間にあちこちのビルから逃げ出た人達で一杯となりました。みんな地震の恐ろしさに、顔色もなくフルえているように思えました。近くの丸ビルは外側にヒビが入り、ころなしに粉塵にかすんで見えました。また近くのビル工事の現場では、三階の床が落ちて死傷者が出たという事です。最初の地震から時々続いていた余震も、どれだけ時が過ぎたのか治まってきたころ、火の手がお堀端の林野局の方からおこったのです。木造ペンキ塗りのシャレタ大きな建物でしたが、またたく間に燃え広がりが、消化活動も思うにまかせず立ち昇る煙と炎は天を焦がし、あたりは熱気に包まれまことに恐ろしい有様となりました。若しこれから市内でこのように火事がおきたらどうなることかと、不安な気持ちで大森の家のことが思い出されました。さて東京駅に行つて見ると、汽車も電車も線路や架線の故障で不通になっており、大森の家まで約十二キロを歩いて帰ることになりました。丸の内から京橋に出て、銀座新橋を経て、浜松町から線路づたいに品川大井大森と歩いたのです。途中銀座のある洋酒類の店では、ビンが棚から落ちて土間は池のようになり、店の人は片付ける気力もなく途方にくれているようでした。また浜松町と品川の間には、人気のない列車が立往生していました。やっとたどりついた大森の家は、幸い大した破損もなくみんなの無事な顔を見て安心しました。その夜東京市内は、本所深川浅草日本橋など各地におきた火災で火の海となり、一晩中夜空を真赤に焦して燃え続けている様が大森からも眺められ、あの火の中で逃げまどい苦しんでいるおおぜいの人達のことを思うと、一睡も出来ず不安な気持ちで朝を迎えたのです。はたしてこれが現実となり、本所被服廠跡ひやくしやうあとの空き地では、三万五千もの人々が地震におびえ、避難しながら苦勞して持ち出した家財道具に火がつき、それが広がり火の海となり逃げることもできず生命を失ったようでございます。今その地には、市内各地でこのような犠牲となった人々を合せて、六万余の遺骨と名簿が慰靈堂に安置され、毎年

九月一日には盛大な法要が営まれております。このような大地震によって、東京は一晚のうちに見る影もない焼野原となり、そしてすべての交通はマヒし、テレビやラジオもない時代のこと、デマが流されたりして不安な毎日が続きました。やがてこれも次第に治まり、震災前の東京の姿と活気をとりもどすまでには、そうとう永い期間がかかったように思います。震災後始めて汽車が東京まで開通した時など、親戚知人の安否を知ろうとする人達で、列車は満員鈴木なりでノロノロと動いていたのを覚えています。私が十七才の時であれから六十年近くなります。今また東海大地震が騒がれております。昔から災害は忘れたころにやってくると言われます。このように、関東大震災は地震より火災による被害がはるかに大きかったことが分ります。これを考えると、地震の時には先づ火の始末が第一で、火の始末によって火災の発生を防ぎ、そしてあのような惨事も防ぐことができると思います。

都電を手で押した

樋ノ爪町会 樋ノ爪長生会

金子章衛



私は浅草区向柳原町一丁目一番地に住居して居りました。浅草では一番南で神田川の近くです。

地震の時二階に居ましたが、から紙は倒れ棚の物はくずれおち、表通りを見て居ると、やねの瓦はぜんぶくずれ落ちものすごいほこりでした。幸い倒れた家は有りませんでした。家の中をかたづけしている中に蔵前

方面より火災がおこり、私は蔵前まで火災の様子を見にまいりました。電車通りには都電が立往生して居りました。火が電車通りまで進んできませんと、電車がやけた時に火が向うがわにうつると思い、二、三〇人の人で浅草橋方面に押し寄りましたが、まさかその時はあのような大火災となるとは思いませんでした。それから鳥越方面をまわりましたが、火災は蔵前だけでした。

家に帰り町の皆様と相談して居ります内、警察の方が夜になるとどうなるかわからないから、日の暮れぬ内に上野の山に避難しなさいとすすめられ、車に家財道具をつみ、四時前に上野に向いました。ところが竹町の電車通りに出ましたところ車と人で前に進むこともできず、やっと山下まで出ましたが、とても山に入ることは出来ませんでした。止むなく池のはた方面に出て東京大学の裏山下に出た時に二日目の夜が明けました。

二日の朝、小石川白山下柳町に妻の伯父が居りますので伯父の家に参り、東大の裏山下まで来ている事を話し、皆無事ならすぐ柳町にこいと申されましたので、午前中に柳町の家に避難することが出来ました。柳町で夜になりましたら、警戒がきびしく、手に刀を持った方々が不良者を見つけ次第ぶちころせとそれはきびしい警戒でした。三日目に浅草の自宅を見に参りましたところ、一夜の内に東京の下町は、焼野原になっておりました。これは余震をおそれて家をすて一時に外に避難したため、後の警戒をする事が出来ずあのような大火災となったと思います。

大地震体験者として私の思います事を申し上げますと、地震でゆれている内は外へとびださない事。おさまるのをまっすストープの火のしまつをする事。

又ガスの元センをしめる事。

町内の警戒をする事。
食料は、買だめするほど心配ないと思ます。



顔面が仏様

芝新町町会 新町明和会

原 伝 蔵

私は当時芝村の中田に住んでおりました。折しも大正十二年九月一日食事どきで、二杯目の御飯を食べべ終ろうとした時でした。突然大音響とともに身体が上下左右に揺れ、一瞬何が起きたのか見当もつきませんでした。どの位時間が経ったでしょうか、ものすごいほこりの中で我に返り、無我夢中で子供を抱えて二、三間先の竹藪へたどりつきました。あとで考えると、どのように竹藪まで行ったのかよく覚えておりません。多分ぶざまなかつこうをしていたと思います。

幸い私の家は一軒家であったため、潰れませんでした。余震が頻繁にあるため、家の中へ入るのは危険で出入りは出来ませんでした。

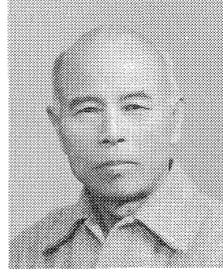
当時私は消防団員なので、様子を見るため近くの家をたづねると、皆は私の顔をみてびっくりしました。顔の色が真青で、仏様のようだといわれました。多分恐怖のあまり血相が変わっていたのかも知れません。その後電気もつかず、止むを得ず庭に畳を三帖ほど敷き、蚊張を吊り寝食をしました。

その後余震は頻繁にあるため安心できず、食糧も思うように手に入らなかったので大変な思いをしました。もうこのような災害は二度と起きてもらいたくありません。

新築で潰れなかった

芝新町町会 新町明和会

田原 多四郎



大正十二年九月一日、当時私は十九歳、浅草佐工門町（今の浅草橋付近）に住んで居りました。この日は休日、朝のうち雨が降っておりましたがその後晴れて大変むし暑い日であったと記憶しております。

十二時頃「ドン」と云う音と共に、上に持ち上げられる様な感じがし、同時に棚の物がバラバラと落ちてきました。立上ったがゆれてとても歩けなかったので、そばの柱につかまっておりました。外を見ると、向いの二階家の屋根瓦が十枚程重り、次の揺れで一辺に落ちてしまいました。その恐しさは何とも云えず、道路は土ぼこりで何も見えませんでした。

当家は新築したばかりで、つぶれる心配はありませんでした。

地震と同時に、あちらこちらで火災が発生し、蔵前高等工業方面よりの火がまわって来たので、家を出て上野方面に向ったが、途中であった人達はみんな「山は人でいっぱいだめ」といつていた。その時誰かが「焼け後に出たらどうか」というので、其の後につづき蔵前片町の所に出ました。その夜はどこで過したの

かまると覚えておりません。翌朝十時頃だったと思いますが、浅草本願寺方面に、何本かのタツマキがものすごい火柱となって立ち上り生きた心地もしませんでした。

その後何度かの余震はあったが、昼どきの火から火災が発生しそれが一面に広がり生き地獄になったと思います。

今ふりかえって見て、地震と共に火事の恐しさを痛切に感じました。

東京の火の粉が飛んできた



鶴ヶ丸町会 鶴亀会

河井万蔵

大正十二年九月一日十二時頃でした。私は明治三十五年生れで二十歳でした。

何の気なしで蕨町へ用事があり自転車が出かけ、今の芝中学の下まで来たとき、突然自転車が動かなくなりました。その内塚越の金子正治さんの工場が、どかんという音でつぶれてしまいました。用水の水がメートルぐらい上り、その時はじめてこれは大変な地震だなと思った。その時はとてもあるく事などは出来ませんでした。

家へ帰りついてみると、家はどうにか無事でした。町内を歩いて行って見ましたところ、柳田工場など、ほかにも五戸つぶれていました。これは大変なことになったと思いました。柳田伯父さんが、つぐんで居たの

で、よろよろしながら植木の根本までやっとなつて来て、よかつたと思つたとたん、今度は、柳田さんの子供が家の下に居るとの事、すぐに屋根をこわし中へ入り三人を無事すくい出すことができました。その内、東京方面が火の海と成り火の粉が家の方までとんで来たように覚えております。

もう二度とあのような目にはあいたくありません。

事業の大転換



小谷場町会 小谷場高砂クラブ

松井元子

関東大震災の思いでをと申されても、もともと文才の無い私ですが五十数年前の思いでと共に、余話をお話ししたいと思います。当時は現在の深谷市本町、本当に町の真中に住んで居りました。

学ぶ健児の数二千（校歌）今でいうマンモス小学校の六年生でした。

長い夏休みも終り九月一日今日から二学期、この日も陽射しの強い暑い日でした。汗びっしょりで帰宅し、下着類を洗濯し棹にかけ様とした瞬間、ぐらぐらと身体中が右に左にゆれはじめました。前の土蔵も大ゆれにゆれております。中食の仕度をして居りました母も庭へとびだして参りました。妹達も吃驚しながら帰って参りました。

それから何回か余震があった事と思いますが、現在の様に情報網の発達して居らぬ時代ですから、東京の

災害など知る由もなく、其の夜は映画館へ行きました。帰途町の人に東京の火事を知らされました。夜空を真赤に染めた東京の空が、二十里離れた深谷の町からもよく見え、只驚くばかりでした。一夜明けた翌日からが大変でした。種々雑多の情報が入り乱れ、身内を案じて東京へ東京へと探しに行った方のうちにも、不帰の客になった話も聞きました。

地震というものの恐ろしさを知ったのは其の後の事です。経済の知識も仕組も何にも分らぬ子供の事として、只毎日毎日が楽しい日々でした。

当時何等かの形で京浜方面に関係のあった企業では、多かれ少なかれ被害を受けた事でしょう。私共の家でも例外なく京浜方面に出荷した輸出用生糸が全滅した知らせを出先機関から受けたのです。その次点から我が家は一步一步と没落の道をたどって行く事になりました。

執達吏、差押、競売という事を肌身にしみて知ったのも、映画では見ましたがまさか自分の家迄とは思いませんでした。数日後には競売、或日学校から帰宅した時、何時も枝振りよく門にかかって居た松の木、座敷にでんと鎮座しました大金庫、姿、形もなく只々部屋が広く見えるだけでした。でも其の他の家財道具は其の儘残っておりまして。両親の思いは、如何にやと察する事もなく其の後の生活も以前と変りなく過して参りました。(今でいう計画倒産とでも云うのでしょうか?)

次から次からと当時の事が走馬灯の様に湧いて参ります。今にして見れば、あの震災を転機に貧富の差が戦後も同じでしょうがはつきり出た事と思えます。

でも本当に悲しい事でした。



人間が家から押し出された

小谷場町会 小谷場高砂クラブ

清水のぶ

忘れもしない大地震、私が結婚して次の年、二十五歳。子供の長男が一歳の時でした。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分……ちようど昼の出来事でした。

その日は朝から小雨が降り続いていました。主人が手打うどんをぶちすつかり食事の仕度も出来、家族五人がうどんをすすりながら談笑しておりました。雨がやんだ様子だなど思った矢先、突然ぐらぐら揺れ、地震だの声に昼食もおろか転がる様にして家を飛び出しました。祖母は子供と先に外に出てくれと大声を出し、むろん身仕度どころではありませんでした。地震は下の方から、盛り上るようなすすまじい揺れ方でした。今でもありありと思い浮びます。

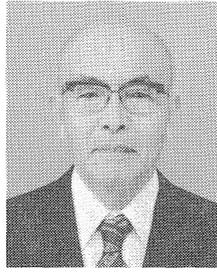
誰もがはい出すように、また家から押し流されるようにして庭に出ました。庭には、お盆が近くなるのでくねを刈り、そのくね木が干してありました。ようやくの思いでくね木の上に座り込むと、目の前の我が家の戸ぶくろが先に落ち壁の土が崩れ落ち、その土煙りがものすごく立ち上るなかを、草ぶきの家は容赦もなく東の方に崩れ落ちました。そのさまは何とも言えぬ気持で、ただただ、茫然と見守るだけでした。

その晩は竹やぶのそばへ小さいトタンの屋根をのせ、小屋を作りました。まだ周りのざわめきも消えぬ頃、南の方は立煙がひどくみえました。東京の方は大火事では、さぞかし怪我をした人や死んだ人も多かつたら

うに、行くえ不明になった人もいるだろうにと思ひながら真赤に見えた東京の空の方を見上げるだけでした。地震のおそろしさに時々胸をしめつけられるようでした。本当に一瞬の出来事だったのです。

今では我が家も三回目家を建て直し、孫や曾孫に囲まれ楽しく平凡な日々をすごしていますが、「天災は忘れた頃にやってくる」の言葉をぐっと頭にきざみ込み、地震の時の心構えは、いつでもしっかりと持っていようと思ひます。

一瞬命拾ひ



塚越町会 青葉会

保 谷 忠太郎

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、その時その瞬間こそ私達の運命を左右した、いわゆる運命の日で有ったとも云うべきか、そしてその運命の瞬間が時々刻々に又近づきつつあるかも知れぬとは、何とも奇しき運命を背負って生れて来た私共であるのかと、あの時を思ひ出すだけでも身の毛のよだつ思いであります。お互い、その時その時の立場立場で多少の相違はあるものの、一人一人の尊い命の生死の運定めになるかも知れぬと思うと、誰でもぞおつとすることでしょう。しかし、それが何とも逃れるに逃れようのない運命であるとするならば、今こそ真剣にその対策を皆で考え、いくらかでもその被害を軽くすることを考えねばならないと思ひます。

その時私は二十一歳、祖父は八十三歳そして祖父は二回目の大地震だとのことでした。私も祖父のように長命であるならば、もう一度震災に会わねばならぬのかと、空想的に考えて居たことがどうやら現実のことかとぞつとします。

私の家は、祖父母や父母の丹精に丹精を凝らして建てた頑丈なことが自慢の家で、建築後まだ何年も経て居ないのでしたが、一瞬にして全潰寸前の有様でした。そして、表の納屋も大音響と共に庭の真中に放り出されるように、見るも無惨に倒れてしまいました。そしてその二階に私は昼食の寸前まで牛のわらじ作りをして居たのですが、食事が終るか終らぬ時の出来事で、ほんとうに危うく命拾いをしたのでした。いま数分間二階に居たならば見るも無残な死に方をした筈でした。

如何に大震災とは云え、余りにも被害の甚大なのに、ただおののきふるえて家族一同茫然自失の有様でした。そのうちに東京方面の空に異様な立雲がもくもくと立昇り、あれが地震雲なのかしらなどと言って居るうちに、益々その雲の勢は激しく自分達の方迄も空を奄おって来るかと思われる勢いです。太陽が沈む頃から、その雲は異様に輝き出して来たので、始めて大東京の容易ならぬ火災に唯々おろおろとふるえるばかりでした。その時の大東京の悲惨極りない状況については、今更申し上げる迄もなく良く御承知のことと存じます。

大正十二年のあの大地震は、昼間でさえあのような悲惨な情況を呈したのであります。若し真夜中の地震だとすれば、被害は更に更に大きくなるのではないかと思えます。私共の立場から考えても地震と同時に真暗やみになったとしたら、どうやって避難したら良いでしょうか。ねむりから突然さまされた瞬間、おそらく私共は唯々驚き、且つうろたえるのみではないでしょうか。どこかの家で火災が起きたとしても、勿論水道も止って居ることでしょう。こんなことを真夜中にじつと考えて見ると、唯々何としたら良いのか目の前が

真暗になってしまいました。今時あのような大地震が起つたとしたならば、はたしてどうなるでしょうか、大東京など一部には耐震、耐火の建物が相当整備されたとは云え、まだまだ大部分がぞつとするような街並をしております。私共の地域は大東京よりも大部良いとは云え、一旦その時は身の毛がよ立つような状況に至る処に起るようにも見受けられます。ましてや多くの人達が、生活の根柢を大東京に依存し、色々の面で支えられて毎日の出入が頻繁で有ることなどや、自動車の氾濫の状況などを考え合せると誠に恐しくなります。しかし唯々恐れて居るだけではどうにもなりません。今こそ皆でお互にあらゆる状況に対処する方途を、真剣に考え真剣に相談し合うことが最も大切だと思います。

物価の値上り四倍に

塚越町会 青葉会

石川喜代



其の日は朝から雨が降ったり止んだり、大変むし暑く気持の悪い日でした。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、ゴーツと物凄い音がした瞬間、大地が上下にゆれ動き、八作の節句なので昼食のうどんをゆでて居た私は思わず土間に這ってしまった。釜から湯がふきこぼれ、かまどの火は恐らく消えてしまったのであろう。「地震だつ」と思う間もなく、はたし機脚の上に梁が落ちて来た。

(注) 機脚……機織機械を置く木製の台の意。(方言)はたあしがはたしになった。

私の家は当時敷布機屋で、母は既に亡く、父と祖母と私、妹と弟が二人の六人家族の上に女工さんが六人居たのです。「あつお祖母ちゃんを」私は夢中で家の中に居たお祖母ちゃんを機脚の下に抱き入れました。其の時私は二十歳、お祖母ちゃんは八十六の高齢、「あーあ助かってよかつた」ほつとする暇もなく、幾度もおそつて来る余震に悩まされ乍ら、家族一同裏の竹山へ逃げ込みました。ふと見廻すと私の家の母屋は半壊、物置と前の店は全壊、隣の家もその隣もつぶれて何とも悲惨な状態でした。其の時でした。「うちのおばあちゃんが見えない」。大声で叫んで居るのは原春吉さんと云う隣のおじいさんです。驚いてかけ寄つてみると庇の下に子供の泣き声がするので、近所の人を呼び集め屋根をはいでみると、孫をおぶつて外へ逃れようとしていたおばあさんは地震の一撃を腰にうけ、倒れて来たかま^{かま}ちを背負つて哀れにも無残な即死、孫の方は不思議にも怪我一つして居ませんでした。昨日まであんなに元気に働いて居たおばあさんかと思つと、何とも哀れで私にとっては衝撃の事件でした。

其の夜からは庭に寝ました。空を見上げると、東京の方角は真赤でまるで昼間のようでした。其の後物価は日に日に上り、震災の前日まで一俵五円だった米が、二日には四倍の二十円にはね上りました。材木、其の他の値上りも凄く、私等貧乏人の生活は本当に血をばく思ひでした。

あれから早いもので五十六年の歳月が流れました。あの時二十歳の乙女だった私も今では満七十五歳、年はとりましたが、お蔭様で身体は健康で、主人には二十数年前に先立たれましたが、優しい息子夫婦と可愛い孫三人に囲まれて平和な日々を送つて居ります。其の間には色々な事がありました。太平洋戦争もありました。

(注) かま^{かま}ち……①床の端にわたす横木 ②戸、障子のわく

しかし関東大震災災程、恐しかった経験はありません。近い将来、東海地震が起ると予想されて居りますが、もう二度と此の様な経験はしたくありません。しないで済みますよう神仏に祈る毎日でございます。

手打ちうどんを作ろう



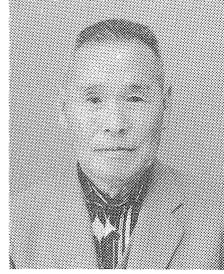
塚原町会 塚原長寿会

松 本 金 蔵

この日は、朝のうち小雨が降っていましたが、次第に晴れむし暑い日になりました。

九月の節句で農家は仕事休みのため、手打ちうどんをつくろうということのでみんなが始めたのです。そろそろ終わろうとしているところに、突然大地震が起り、そのうち、大音響と共に家がつぶされてしまいました。地震がおさまってから、つぶれた家のまわりを捜してみましたが、両親と子供二人がみあたらないのに気がきました。大きな声で呼んでみたら、返事があつたので安心しました。しかし、家の下敷きになり、なかなか出て来ることができませんでした。幸い怪我もなく、みんな無事でした。しかし、見る影もなく、つぶれてしまった家をながめ、改めて地震の本当の恐ろしさを感じました。

コソ口を持って避難



塚原町会 塚原長寿会

須賀竹松

大正十二年九月一日。小雨でしたが、私は出仕事をしておりましたのでその日も出かけました。雨がやまず、仕事にならず十時ごろ帰り、お茶を飲みながら話をしておりました。すると十一時五十八分頃、「ゴ—」という不思議な物音が聞こえ、まもなく上下左右に揺れ、立つことができませんでした。その時台所ではコソ口に火を起こし、昼食の支度をしていだったので。その火を裏の竹やぶまではうようにして持ち出しました。そして家族全員が竹やぶまで避難したのです。すると隣の家が目の前で潰れてしまったのです。しかしその音さえ耳に入らなかつたのです。少し静かになったので庭に出てみますと、二三軒隣の家がつぶれ、おばさんが家の下敷きになっていて、この噂が耳に入り、私も急いで行き屋根を壊す手伝いをしました。しかし一分おき位に余震が来るのでなかなか仕事が進まず、ようやく屋根や壁を壊し中に入ってみると、柱が折れておばさんの首にささって、鼻から血を出し既に死んでおりました。しかし背中におんぶしていた子供は、声をからして泣いていました。おおい帯が前で結ばれておりますのでほくことができず、持っていたナイフで帯を切り救い出しました。幸いにして子供は、顔にかすり傷を受けた他は怪我はありませんでした。私の部落は五十戸程の小さなものでしたが、二十戸程潰され、残りの家もみな三十七センチ位は傾きました。私の知っている範囲での死亡者は二人程です。

夜になり、東南の空が真赤に染まりました。東京が火の海になったという噂を聞きたいへん驚きました。もうこのような目には二度とあいたくありません。

震災前夜の真赤な月



神戸町会 八千代会

相原 正

大正十二年。十五歳の時でした。私はその当時、東京都荒川区東日暮里に住んでいました。八月三十一日の夜、兄と二人で上野へ遊びに行き、上野の山から見た月がいつものと違い火の玉のように真っ赤な色をして、何とも言いようのない不気味な光景でした。

翌九月一日、午前中は朝からまるで蒸し風呂にでも入ったような暑さで、ムシムシとしたいやな日でした。丁度私が昼食を食べようと立ち上がった瞬間、ゴーというものすごい音が聞こえたと同時に、自分の身体が前のめりに跳ばされました。グラグラとゆれ動く中を何とか立ち上がり、夢中で柱につかまり、余りの恐ろしさに唯おびえているばかりでした。それからしばらくの間、嵐の中で船に乗っている様な状態が続きました。地震が少し治まるとやや気持も落ち着き、自分の家が傾いて半壊しているのに気が付きました。

その後、度々強い余震があるので外出もままならぬ状況でしたが、外の様子も気にかかるので、余震の合間を見て表へ出た時、前の家がつぶれて全壊しているのが目に入り、大変驚いた事を覚えています。当時

はラジオもテレビもなかったので、大部流言飛語が飛び交い不安な気持でいました。午後三時頃、警察官の指示に従って行動するようにとの連絡があり、家族や近所の人達と一緒に動いてきました。幸いにも、家の近所からの出火がなく火災はまぬがれましたが、遠く四方の空が真っ赤に染まり、その火災の大きさが想像できました。

本当にあの時の恐ろしさは今だに頭から離れません。あれから五十余年経った現在、災害は忘れた頃にやってくる。また、備えあれば憂いなし、その言葉が身に沁みている今日この頃です。



子供を両手に引いたまま

神戸町会 八千代会

石原 たみ

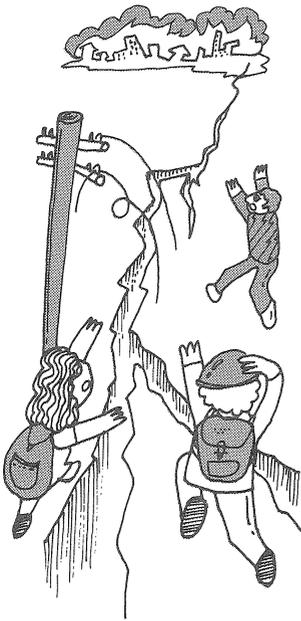
グラグラと大地は揺れ一瞬にして火の海と化し、平和であった街は阿鼻叫喚の巷となった。あの大正十二年九月一日正午近くに起きた関東大震災の思い出は未だに忘れられぬ惨事であった。

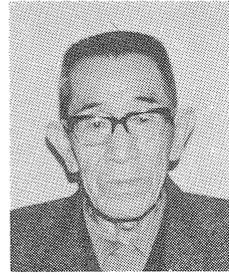
私はその時十六歳、日本橋本石町三越和裁部にて修業中であった。それ地震だ火事だと恐怖に包まれて小さな包を持って、狭い露路に崩れた壁や落ちた瓦を踏み越えながら大通りへ出ると、ネコイラズ本舗は既に燃え上り、又各所からも火の手は燃え拡がって、道を知らぬ私はどの方面に逃げたらよいかわからず、仲間の人と離れない様に気を配っていた。それに相次ぐ余震の為に大小の地割れを恐れながら、まず日比谷公園

に避難した。途中常盤橋下には燃け死んだ人が累々と浮かび、中には子供を両手に引いて死んだ親の哀れな姿も目に止った。

だが自分達はどこまで地震と猛火に逃げ切れるかと思うと、この惨事は他人事でないと思った。公園には電燈は無く、人の顔は周りの燃上る炎の明るさで見分けがつかく程度であった。暗やみより来襲する蚊軍と空腹で眠れない一夜を公園広場で明かした。さあこれから何処へ逃げたらよいか行く先が案じられた。早い人は目立つ大木や塀に避難先を書いて置く人もあった。誰に聞いたか私等仲間も十條に焼けない家があると知り、日比谷よりその家まであるいて行って泊った。朝になって気がついてみると、それまで大事に持ち続けて来た箸の包みがないのに気付いた。どこで手離したかそれは知らず本当に夢中であった。

幸に三日夜おそく上野駅で汽車の窓から押込められるように乗車出来たが、帰郷を急ぐ人が一杯で汽車の屋根に登っている人も多かった。汽車はそれにも構わず走り出し、栃木の駅に四日朝四時に着いた。早速迎えて来ていた父に連れられ、私の無事を喜ぶ家族のもとに帰れた。恐怖の三日間死線をさまよったこの体験はもう二度と御免だ。





ーパイのビールに酔う

芝富士町会 芝富士きつき会
弓 場 政 吉

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、私の家は当時東京府豊多摩郡代々幡町大字笹塚町駅の近くでした。(新宿駅まで徒歩四十分ぐらい)この日も早朝より晴天でした。八月下旬より天気もよく風の多い日が続いています。特に三日程前より毎日昼前後より強い風が吹き当日も吹き始め、青山練兵場や代々木ヶ原の砂煙りのせいか、上空はドンよりとなり暑い日でした。

晦日に勘定に行きビールを貰い、一日は休みなので隣りの主人と飲みながら雑談して居ると、突然ゴーという音がしてきたので、またひどい風になるナーと話していると「ドスングラグラ」たちまち柱のボンボン時計が下の長火鉢に落ち灰かぐらとなり、同時に棚のものがガラガラと落ち、玄関の戸障子はバタバタと倒れる始末でした。子供をかかえ女房と飛びだし、三間程先きの空地に行くのによろめき、どうにも思う様に歩けずわずかなビールでこんなに酔ったかなと思いましたが、幸いにも家は竹藪を切り開いて小さな平家を建てたばかりで、現在の三越のそばより引越してまがないのでつぶれずにすみました。近くの二階家や古い平家等はずいぶん潰れました。そのうち甲州街道の薬局から薬品の混合で火が出ましたが、つぶれているのでたいした事もなくすみました。家の前裏は淀橋浄水場まうちにはいつている急流玉川上水の土手で、向う下は方南田圃なので火事の心配はありませんでした。土手があちらこちらで崩れ水害さわぎが起きました。私共も余震がひ

どいので家には入れず、裏の竹藪を切り開き戸板をならべ畳をしき蚊帳をつつて住んで居りました。

二日日本所の親戚へ見舞いに行きましたが、甲州街道は避難民が府中八王子方面にいくため大変な人でした。本所にいったが焼野原、大川にかかっている両国橋が飴の様に川面に垂れさがっており、やっと一人づつ渡り被服廠跡にいつて見ると山の様な屍と悪臭、軍隊が出て居り実に御気の毒でした。それより吾妻橋に來ましたが、同じく飴のように垂れ下っており、やっと水面すれすれの所をつかまりながら渡り浅草公園に入つたところ、たくさんの人々が疲れと空腹で放身状態でありました。十二階の折れたのを見ながら吉原にいつてみましたが、ここも被服廠跡と同じで、弁天池より犠牲者を長い鳶口で引上げて居りましたが、後から後から飛び込んだので順に下になり、また池の水が熱湯になったため何万人か解らない人が亡くなられました。橋の欄干には色とりどりのじごきがたくさん長く結びついていました。(入水の時につかまっていた者)それから上野にでて帰つて來ましたが、上野の山も避難民でいっぱいでした。

私の体験から気がついたまま書いてみますと、

- 一、避難場所として造る公園の広場には大木を多く使わぬ事。水の上の鉄橋さへ大火となると溶ける。
- 二、広場に大勢避難する場合は絶対に荷物は持たぬ事。非常袋だけ持つべし。
- 三、大火に竜巻はつきもの被服廠跡がよい例です。命とりとなる。
- 四、非常袋にほしいもの

晒は用途が広いがタオルはダメ。地震の時は、皆はだして飛び出すので軽い履物、(運動靴の安物等)目薬、流で言まに注意する事。

(注) じごき……一幅の布をしごいて結ぶ女の腰帯



電気が付いて生き返った

芝富士町会 芝富士さつき会

小宮 ゆき

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、この日は私にとって一生忘れる事の出来ない日です。

丁度お昼の食事時で、主人と私と三歳と一歳の子供と食事をして居りました。その時何とも云えない「グッ」という様な音と共に「ぐらぐら」と揺れたのでした。あっと思って立ち上がるうとした時、棚の物は一度に落ちてくるし、天井につるしてあったかごも落ちてくるので、立ち上っても舟に揺られているようにひと足も動けませんでした。床に座わりこんで少し揺れるのがしずまるのを待って、主人と私が子供を一人づつかかえて表へとびだしました。家は骨董品の店でしたが、店の中を見る事も出来ず外へ出たのですが、入口の前に一間ほどの石燈籠がかぎってあり、見ると頭と胴と二つにはなれていました。もしあわててとびだしていたらこの倒れた石の下敷になっていたのではないかとぞっとしました。外へ出て見ると大勢の人で大変でした。ほこりと煙りが立ちこめた様で、真昼なのに太陽の色も薄赤く見えうす暗く感じました。空には入道雲がニューツツと不気味に立っていました。家の横は電車通りで、その向うに黒田侯爵家の屋敷があつて昔のままの大きな門が立って居りましたが、それが舟の様にぎいぎい音を立てて揺れていました。門の両側に土塀がつづいていて、土塀の中に門番の家が建っていたのですが、見ると何もありません。一度で潰れてしまいました。私の家は二階家でしたので、隣りの家へ寄りかかる様なかつこうになり潰れなかつたので助

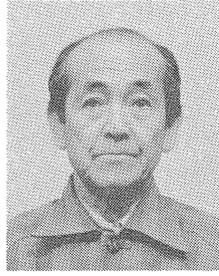
かりました。

赤坂は花柳界が近いので料亭が多く、昼時だったので赤坂見付付近から火が出てどんどん燃え広がりました。初めは風の具合で都心の方へ向って焼けていきましたので、我家の方は助かるかと少しは安心して居たところ、夜になって風向が變つてこちらへ向って参りました。黒田家の前へだれもが荷物を運び、地面へ敷物を置いて座り込んで居りました。その後時々余震があり、水道は壊れて水は出っぱなしですが消防車がくるはずもなく、夜中の十二時頃に私たちの家が焼けるのを、只皆で呆然とながめているだけでした。

朝になって見ると一面の焼野原で、どこに何があったのかわかりませんでした。最近の様にビルは一つもなかったのです、ところどころに土蔵がぼつりぼつり残っていてくすぶつておりました。我家は町の角だったので火災はそこで止りました。通りの向う側は焼けないうちに軍隊が来て、破壊消防とかで全部こわしてしまつたので燃え広がらず、山ノ手一帯は火災からのがれました。その夜は高台の知人のお宅へ避難しましたが、余震が恐くて家には入れず立木の間に蚊帳をつつて野宿しました。翌日青山の親類へ行き、しばらくお世話になりながら毎日家の焼跡へあと片づけのため通いました。やがて焼トタンばりのバラックを建てて、せまいながらそこへ落ちついた時は、ほんとうにほっとしました。しばらくはろうそく一本で生活していましたが、まもなく電燈がついた時は生きかえった思いでした。バラックの冬は実に寒く、夏の暑さ暴風雨の夜の恐ろしさ、それでも五年ばかりがんばりました。全国の方達から、食料品衣類などたくさん送っていただいた事も有難くとても助かりました。二度とこんな思いは私の生きてるかぎり、子供達にもさせたくないと祈って居ります。

万一突然こんな事に出会った時は、先づ火の用心が第一で慌てない事、よくまわりの様子を見て安全な場

所を考えてにげる事です。命さえあれば後は何とかなるものだとつくづく思い出されます。私も七十九歳になりました。



この世の終り

芝二丁目町会 芝二福寿会
木村 力之助

あの時、私は二十歳来年は兵隊検査という年だった。日暮里駅のそばの報知新聞社で配達員をしながら学校へ通っていた。当時は苦学生であった。

大正十二年九月一日、暑い日だった。仲間と一緒に二階で昼飯を食べようと箸をとった瞬間、ごおっという地鳴りと共にぐらぐらと来た。お膳の上に壁土がどさつと落ちて部屋の中は黄塵万丈、筆筒は倒れる額は落ちる電灯はぶらんこのように大揺れにゆれ、われは只頭を両手で抱えて突っ伏しているだけでどうすることも出来ない。一分間ぐらいで揺れは治まったので階段を駆け下り外へ出た。近所の人たちも茫然自失の青い顔をしてふるえてかたまっていた。前に小さな溝川があったが、その水があ揺れで道路に半分位ぶちあけられていた。

鉄道線路へ逃げろ揺り返しがくるぞと誰かが叫んだので、皆先をあらそって東北線の線路上へ這い上った。五六分後に大きな余震が来た。歩いている人はみんな転んでしまった。

幸い家は倒壊しなかったので、皆また家に戻って後仕末にとりかかった。その間にも小さな余震が何度も来た。私は本郷と竜泉寺にいる従兄の安否をたしかめようと身仕度をして出かけたが、下谷の坂本あたりへ来たなら、もう潰れた家や切れた電線などが道を塞いで満足には歩けないが、屋根を乗り越えたり廻り道をしたり竜泉寺の近くまで来たが、今まで黄煙があがっていた空が黒煙に変ってきた。あちこちが焼け始めているのだった。今来た方面も燃えはじめた。四方を火に塞がれて身に危険を感じたので、私は浅草公園めざして逃げた。十二階は半分に折れた残骸をさらしていたが、観音様のお堂は無事だった。六区に入った途端に物凄い突風が起り、映画館の看板がばたばた落ちて来たので瓢箪池の方へ逃げた。

鋭い銃声が起ったのできてみたら、花屋敷で猛獣を射殺しているのだという。むごい悲しいことである。あとでできたことだが、吉原の池ではお女郎さんが火に追われて飛込んで六百人も死んだということであった。

私はもう従兄の見舞どころではないと、群衆に交って上野公園へ急いだ。夕方になると下町一带は真赤な紅蓮の炎の中にあつた。西郷銅像のところから見ると松阪屋も、上野駅も炎をあげている。電車も所々に止って燃えていたが、自動車は殆んど見かけなかった。

そのうちに大爆音がつづけて起つた。瓦斯タンクに火が入つたのだらうという人もいた。

電灯がつかないので蠟燭のあかりで晚めしを食べたが、蒸し暑くてねむれないし、また何時大きい余震がくるかもしれないので蒲団をかついで東北線の鉄路へ敷いてそこでねた。

夜が明けても、下町の火事は消えるどころかますます燃えひろがって、黒煙天を焦す情景であつた。それが一つにまとまつたのか別のものかわからないが巨大な雲の柱が不気味に聳えたつて、この世の終りのよう

な不安と恐怖を人々に与えた。

道路は田舎へ避難する人と大八車の列が続々とつづき、また日暮里駅が東北線の始発になったので駅前は何千という人の列が出来た。

中には避難民ではなく、田舎へ蠟燭などの買占めにゆく商人も大分交っていた。列車は鈴なりに屋根の上機関車まで一杯で、降りる時石炭を袋へつめている奴が逮捕される事件もあった。

三日三晩燃えつづけた猛火が治まると駅通りの行列をあてこんで、汁粉屋やすいとん屋が店を出しはじめた。困ったのは近所の人で横丁はそれらの人の大小便で臭くて通れないほどであった。

私の父母兄弟は横浜にいたが、市は全滅という噂がとんでもない親兄弟には逢えないと半ばあきらめていた。処へ、四五日経ったある日、背中に村上徳三郎と書いた旗を立てて神奈川の伯父が、握り飯をうんと背負って訪ねてきた。みんな無事だ安心しろ、お前たちも無事でよかったですとまた歩いて帰った。物騒なのでわれわれ若者は夜になると竹槍を持って自警団の任務についた。

そのうちに品川から東海道線が無料で出るといふ噂をきいて、握り飯を背負って私は品川まで歩いた。神田、日本橋、銀座と一面の焼野原では所々に水道管が水を噴いていた。

列車は無蓋貨車で暑いことおびただしい。桜木町駅の焼跡で降されて中村町の実家へ急いだが、橋の多い横浜でその橋がみんな焼け落ちて川を渡るのに苦労した。その川には黒焦げ死体が幾つともなく浮いていた。一様に真っ黒で男女の別もわからず顔もわからなかった。

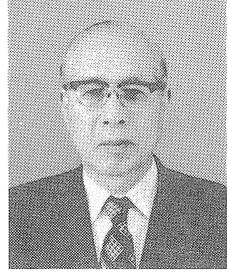
横浜は噂の通り全滅であった。市役所と港付近の外は一望の焼野原で、異様な臭気が漂っていた。実家は山際にあつたのでみんな山へ逃げて生命は助かったが、家財道具はみんな焼けてしまっていた。山の上に薙むしろう

をたらしめた乞食の小屋みたいな中に、市から支給された毛布を敷いて親子五人かたまっていた。近所の悲しい話をたくさん聞かされた。また他人の災難につけこんで火事場泥棒がたくさんいたこともきいた。人間というものは何と浅ましいものかと考えさせられた。そう言えば本所の被服廠跡では三万人も折重なって焼死したが、その死体の指環を盗るために指ごと鋏で切って、その指をたくさん詰めた袋を持っているのを巡査に見見されて捕まった男もいたという。一方死体の片付けを無料で奉仕した俠客もいて、善玉悪玉はいつの世にもいるものだと、感激したり憤ったりした。

後藤新平東京市長が総指揮で、帝都の復興がはじまった。トタン屋根のバラックが焼跡にどんどん出来て、上野の山から見るとキラキラ眩しかった。私も学校をやめて横浜から家族を引取って一緒に暮らしはじめた。

報知新聞社だけが焼け残ったため購読者が急に増えて、朝刊など一度には持てず二度も三度も取りにいった。配達した。

財産は全部なくしたが、私の親戚では一人の死亡者も出なかったことは全く奇蹟に近かった。今日再びあの程度の地震が起つたらあの時の比ではない。家も家具も化学製品が多く、自動車も一家に一台はあるし、首都高速道路、新幹線、高層ビルの林立など考えあわせると全くどうなるのか見当がつかない、平常から有事に備える外はないと思う。



トラックの荷台に乗って砂利道を八十キロ

辻町会 敬和会

平田 忠直

私が小学校六年の二期期の始まった日（大正十二年九月一日）は授業は行わず校長先生が全校生徒を校庭に集めて順示があり、そのあと教室にはいり学級担任の先生から二期期に向っての心構えや、夏休みの宿題を集めたり、その講評などがあり十一時頃には家へ帰りました。

大地震の日は非常に蒸し暑い日であったと記憶しております。家で昼食を食べ始めたのは十一時五十分頃だった。私が二はい目の御飯を食べはじめた時、突然みしみしと激しく揺れだした。地うなり、横揺れ、上下動揺れが一分間も続き、まるでトラックの荷台に乗って砂利道を時速八十キロ位で走っているような揺れ方で、とても立っては居られませんでした。台所の戸棚に入れてある酒、醤油、サイダー瓶が激しくぶつかり合って落ちたり壊れたり、重ねてあった大皿、小皿が殆んど使いものにならなくなってしまいました。

私は地震が始って十秒位たってから箸を箱膳の上に置き、外へ出ようとしたが歩けないので、這ったり戸や柱や障子につかまりながらやっと表の庭へ出ることができました。おぢいさんや妹は外へ出られないので台所へ降り、腹這いになって地震の止むまで待っていたそうです。地震が止んだので家へはいり御飯を食べようとしたら、台所に近い板の間だったので御飯の上へ煤とほこりがかかって食べられないので、ほかのものを食べて昼食を済ませました。

食事が終わってから室内の様子を見たいと思ひ居間へ入ると、時計は十二時ちよつと前で止っていました。床の間では花瓶が倒れびしょびしょになり、額は鴨居からはずれてぶらぶら垂れ下っていました。納戸では箆笥が一さお倒れ、その上に乗せてあったボール箱や人形が、ケース毎ふつ飛んで足の踏み場もないありさまでした。奥の部屋、女中部屋、作男の部屋などはほこりにはなっていたが、被害は殆んどありませんでした。

その後余震は十回以上もあつたと思います。後から気がついたのですが屋根が東に傾いていることがわかり、家の中で調べたら柱と建具との透間が二センチもあるのには驚きました。

午後三時頃、隣の友達が地震で潰れた家があるので見に行こうと誘ひに来たので、二人で出かけた。裏へ出ると倒れた家が見えた。百五十メートルぐらい行つた所に川があり、川幅は五メートルぐらいで石橋がかかつていたが、先程の大地震で畳半帖大の大石が二枚川に落ちていた。その石の手前で随分ひどい地震だつたなあと話していたら、又、地うなりがきて揺れだした。二人は道の真中へ這つて行き地震の止むのを待った。道路のあちらこちらに地割れがあつたが、さらに新しい地割れができた。石橋の石がまた一つ落ちかかった。川の水は地震で揺れている間にだんだん大波となつて、水面から六十センチも高い土手の上まで押し上げてきた。倒れた家はそこから百メートル先だが、いつまた地震が来るかわからないので引き返して友達の家へ行つた。友達の家は古い家で屋根はトタン葺、壁は荒壁だった。壁土が地震のたびにぼろぼろ落ちて台所はそのままになっていた。食器戸棚へ茶碗、大皿、中皿、小皿、瓶類が置いてあつたが、重ねておいたので殆んど割れてしまつて裏庭の竹やぶの角にまとめて捨ててあつた。

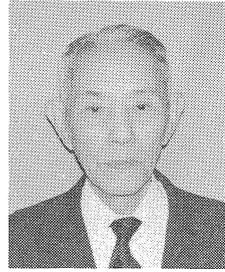
電気はどこかで故障し一日の晩はつかなかつた。夕方になると東京方面の空が真赤になつていた。その頃

はラジオもテレビもない時代で、後から新聞で東京の災害の状況を知ることができた。

私は過去の体験から次のような地震対策を考えました。

- 一、建物 よく点検して補強しておく。
- 二、家具類 倒れ易いもの（高くても低くできるものは低くする）
- 三、食器類 不断使用するもの以外は紙などに包んで保管する。（どこの家でも出し過ぎている）
- 四、ガス 外出の時、地震の時続発のおそれがある場合は元栓を締めておく。
- 五、電気器具 特に大型蛍光灯等の下は危険。
- 六、待避場所 家庭、職場、学校、どこにするか決めておく。
- 七、防災用品 防災用具、食料等の準備。
- 八、貴重品 現金、貴金属、重要書類はまとめておき、いつでも持出せるように準備する。
- 九、医薬品 包帯その他医療品をそろえておく。





巾一尺の地割れ

辻町会 敬和会

深 沢 雄 八

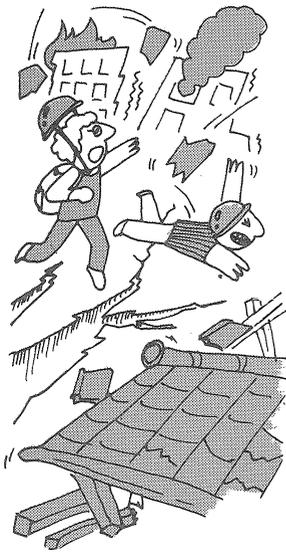
私は明治三十七年生れで当時十八歳、勤務先は東京向島鐘ヶ淵（鐘紡）と隣り合せに立地していた。日本車輛製造（株）東京支店に勤務し、機械仕上工として働いておりました。私の伯父は、向島区寺島町五十八番地、現在の三共製薬（株）のある同じ町会の馬場町会に（当時会長は伯父）居住致しておりました。この頃の私は未だ一人前の職人ではなく、徒弟として伯父の家に厄介になっておりました。大正十二年九月一日朝いつもの様に弁当を持って会社へ出勤し、午前十一時四十分頃、お昼の湯茶を貰いに行きました。その帰りに突然大音響と共に、左右、上下の大揺れに会い、歩行はもとより立止っていることさえ危ない状態でした。新しく建替えたばかりの新築工場へころがる様に逃げ込み、五寸角の柱に、かじり付いて、少し静まるのを待ちました。少し静まったのを機にもとの職場へ帰りましたが、地面に大きな亀裂の生じた所があり、巾にして約一尺位、長さ約十五尺位ありました。まわりを見廻しますと老朽した建物が三ヶ所ぐらい倒壊した様でした。

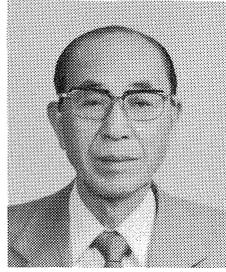
その内地震も幾らか治まったので、会社の方より取敢ず各々自宅に帰り、家の始末をされる様にと伝達がありました。急いで家に帰り掃除やら何やらで夕方迄落付かないままで過している内に、夕暮れとなるに従って空が真赤に映り、近所の人々も、東京方面が広域にわたって火災が発生し、火の海と化した様子だと誰

言うことなく騒然たる様子でありました。町内会では緊急処置として、青年団に命じ夜警を今夜から行う事になり、本部が設けられ私もその一員として前後夜交代で毎晩夜警をして廻りました。翌日被害が大きいため、会社は九月末頃まで臨時休業すると伝えられました。

家庭にあつては、食糧は一切配給制になり、もともになるまで何回か玄米の配給を受け食べた事もありました。その後刻一刻と東京方面の惨状が伝えられ、余震も日夜を分たず毎日の様に震度三、四度ぐらいの強震に見舞われ、その度に肝を冷す場面も毎日の様に続きました。その間各家庭では非常用水としてバケツ、その他の入物に出来るだけ多く水を用意して置く様町会を通じて指示がありました。

一方東京方面に居住している親や兄、姉、親戚の安否を、火災が始まるのを待って四日の日に弁当（オムスビ）水筒を持ち、服装は足袋はだして出かけ目的の場所にやっと着きましたところ、家は一軒残らず焼落ちて無残な情景でした。それでも一早く避難した先の場所が立札に書かれておりましたので、後日見舞に行く事が出来ました。ただその中で本所区亀沢町に住居しておりました親戚の方が、近くの被服廠跡地へ避難したため、二人共焼死したのが何時までも何とも言えない悲しみでした。また往復歩いた道すがら、目に付いた惨状は全く言語に絶する情景であり、川という川、水留り、池等水のある場所には幾十幾百となく死屍が浮き上り全く目を被うものがありました。





阿鼻叫喚の巷

柳崎町会 柳崎寿会

並木利夫

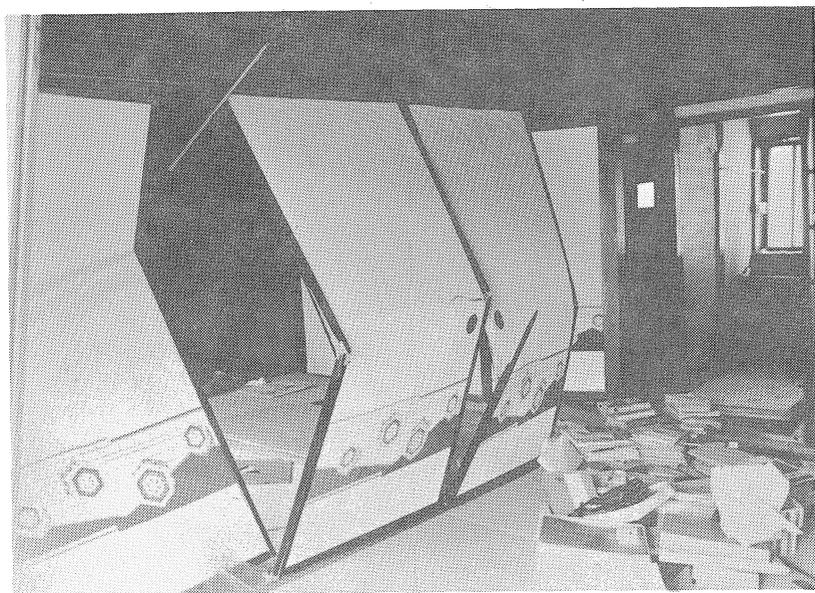
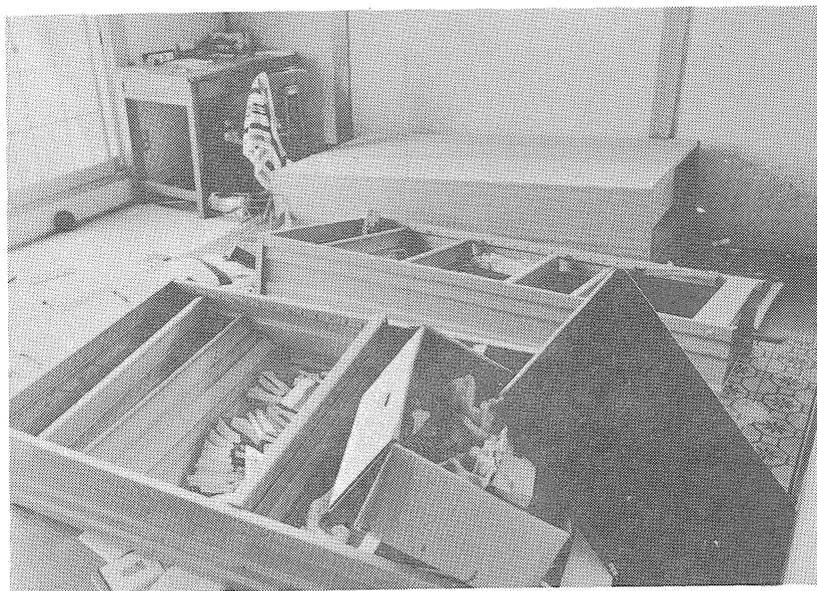
去る大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突如として関東一帯を襲った大地震は今や五十有余年を過ぎ去りましたが、今ここに當時を思い出す時、地震の如何に恐ろしいかを身に泌みて感じます。一瞬にして阿鼻叫喚の巷と化し、数多くの人命と財産を失った惨事は筆舌に尽し難いものがありました。

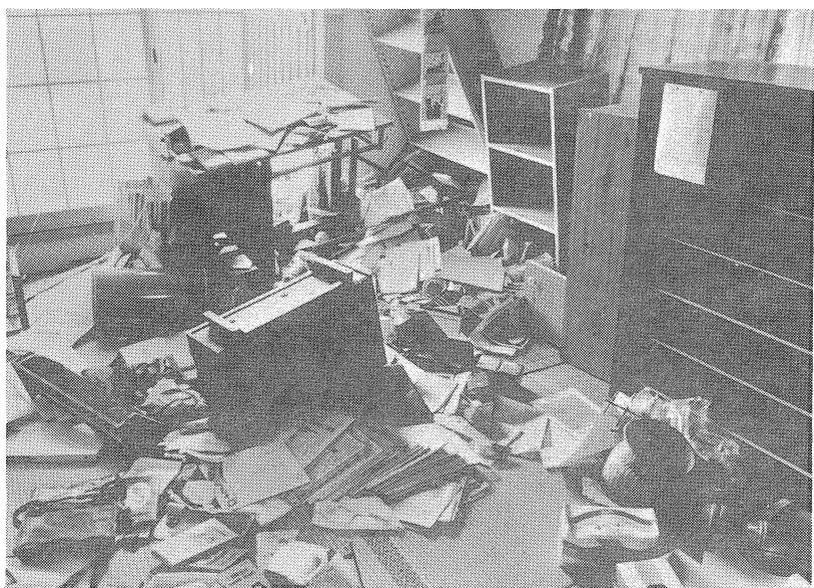
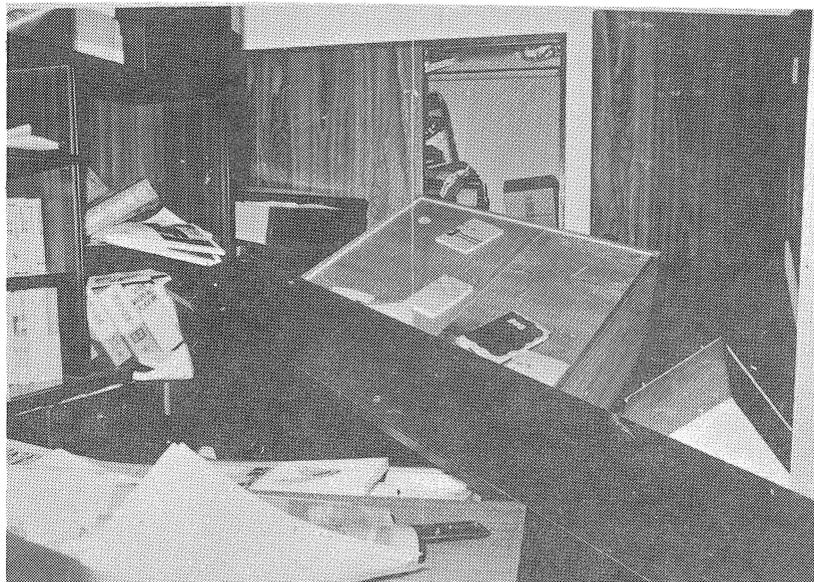
私は当時十八歳でした。農事半日の仕事も終り昼食を済ました折「ゴー」と云う異様な音響と共に家が揺れ始めたので、地震だと言いながら一同して庭先に飛び出しました。家が倒れては危ないと思ひ離れた処に走りました。始めは西から東に揺れて居りましたが、次第に烈しさを加えて立つて居る事も出来ません。何となく身体が宙に浮いている様であったりを見守っている内に、物凄い音と共に門が倒れました。これはいけないと思う間もなく、瓦葺屋根の大きな物置が倒れてしまったのでした。住いを見守ると、ギーギーと烈しい音を立てて左右に二尺から三尺ぐらい揺れているので、住いだけは倒れない様にと思わず手を合せてしまったのでした。やがて揺れが静まった時には、家族は只、呆然として荒れ果てた家を見詰めながら、目と目を見合わずばかりでした。この様な過去の大震災を体験致しました私は、今後何時又地震が起るかも計り知れず、天変地異は如何とも致し難く、地震災害の恐しさをつくづく感じております。

宮城県沖地震 の被害の状況

昭和五十三年六月十二日十七時十四分宮城県を中心に東北地方一帯に強い地震が発生した。

震源の深さは四十キロメートル、地震規模マグニチュード七・四と発表された。(関東大震災はマグニチュード七・九)この地震で二十七名の尊い人命が奪われ都市機能(都市ガス・長時間断水等)がマヒし災害対策の見直しをせまられた。









芝村誌（編者小泉安太郎氏）より抜すい

天災地殃は人の及ぶところにあらずと言へ平素勤儉力行萬一に処するの
覚悟あらしめば又以て自然の脅威も減殺し得るものと思ふ。

天 變 地 異

大昔は知らず、江戸時代、今を距ること二百七十九年、明暦三年に、江戸に大火があつて、其の時の死者が十萬八千人、實に江戸を蕩盡したと云ふからには、定めし吾が村へも、避難民が殺到したと思ふ。其の明暦の大火より、四十六年目の元祿十六年に、大震災があつて、江戸にて三萬七千人、小田原より品川間の街道に、一萬五千人、安房上總に、十萬餘人の死者を出した。此の時も、江戸の近郷なる吾が村は、相當被害があつたらしい。引續いて、五年目の寶永四年に、富士山の爆發があつて、五畿、東海道は、地震海嘯が起り、此の邊も天日晦暝、暗夜の如くであつたと云ふ。其の後、天明二年に、淺間山の大爆發があり、同六年の丙午には、關東大水害があり、享保五年に、復た關東諸國に大風雨あり、同十二年に、江戸開府以來の大水を見、更に寛保二年八月一日には、關東一帯の大洪水を來たし、弘化三年の丙午には、是れ又大暴風あり、利根川筋權現堂の堤が崩壞して、此の邊一圓の湖水となった。其の翌年、又も大地震があつて、村内の住家は滅茶々々になつたと云ふ。其の後、安政二年に大地震があり、相當の被害があつた。

明治時代に至り、二十三年八月廿二日、數日來の大降雨に依り、内郷河川用惡水路は、各脈路を追ひて洪水奔注し、尙ほ同月三十日に大暴風を伴ひ、遂に見沼代用水元塘の中條堤塘は、五十九間決潰し、逆捲く奔

流は、南北埼玉、北足立、北葛飾の四郡に氾濫して大洪水となつた。明治四十年の出水は、其の二十三年の出水より更に大きく、荒川沿岸の町村は、全く一面の泥海となつた。

吾が村は、此の時、美谷本村笹目村方面より押し寄せる水先きを、鐵道線路にて喰ひ止めんとし、村民總出動にて防禦に努めたが、遂に線路を總越しになり、加ふるに利根の決潰水は、即ち伊刈、柳崎方面に襲來して、忽ちにして全村水浸しと爲つた。

而して此の慘害幾何も經ざる四十三年に、復も以上の大水害に出逢つて、村の經濟は根本より覆へされた。

此の時は、八月二日から細雨降り續き、九日に至り暴風雨となつて、各河川は、刻一刻に増水し、荒川筋は、土手五合となり、十合となり、終に溢水して、内郷に注下し、地水と合して、蕨方面は見る／＼田も畑も一緒となつた。先年の失敗に懲りて、何の施すべき策もく、唯だ自家の防禦に狂奔する許り、果せるかな、鐵道線路は、何時の間にか所在を没して、唯聞くは悲鳴の聲、救助の叫であつた。中田方面は、浸水即ち家根棟を侵かし、樋ノ爪神戶は、床上三四尺、伊刈方面は、床上五尺乃至六尺に達した。茲に於て、早速郡役所に迫り、慈星院長徳寺の二ヶ所にて炊出しを始め、全村へ配布した。二三日經て、慈星院を止め、長徳寺一方で繼續したのは二週間であつた。其の時帆前船が炊出米を積み、長徳寺門前に横付けになつたものには、人皆驚異の眼を瞠つた。

其の大暴風の後は、連日晴天で、爲めに田畑の作毛は大半腐爛して、殊に澹溜の永かつた、伊刈柳崎の耕地が、最も被害激甚であつた。

吁々、秋風空しく吹いて田に一包の米なく、畑に一塊の薯なく、残るは徒らに、借金ばかりであつた。

扱又、大正十二年九月一日には、安政以來の大地震があり、其の區域は、一府六縣の廣きに亙り、其の被

害は甚大にして悽慘を極め、就中、東京、横濱は、之に火災を伴ひ、滿目荒涼たる焦土に化し、人畜の死傷累々として算なく、親を喪ひ妻子に離れ、其の甚しきは、一家を擧げて全滅の悲運に遭遇したもの、又九死に一生を得、辛ふじて難を避けたるも、飢えて食するにも無く、渴して口を濕ほすことも出來ず、宛ながら生地獄、一面又流言蜚語各所に傳はり、人心更に恟々極度の不安に陥り、九月二日遂に戒嚴令が布かれた。吾が村も火災とも無けれ、震災激甚で、今茲に當時を回想すれば、朝來降雨があつて、午前十一時頃一寸晴れ間を見せ、再び薄曇りとなり、何となく世間が、無氣味の霧圍氣に包まれた。然るに十一時五十八分、突如として鳴動、上空に震撼すると同時に、地震ふこと數回、全潰、半潰、隨所に起り、人は轉倒して地に倒れ、溝に轉がり、阿鼻叫喚の巷と爲つた。編者は此時、役場に在つて、舍外に跳ね出された時、騒然たる大音響と共に、學校（今の芝小）の一棟が崩潰した。此の日、暑中休暇後の授業始めであつたから、又幸に放課後であつたから、事無きを得たが、尙ほ女先生三人は居残り、夫れが間一髪にして難を遁がれた。自分は惶惶役場を出で、大門先より望めば、峰町の家並みは處々疎になつて居るのが見えた、漸くにして家に歸れば、分家の豊吉の宅は全潰して、妻子は家根の下敷になつて居ると聞き、直に飛び込んで、近所の人達と梁間を潜り、搜索すれば、無慘や小供を脇に抱へて妻は、即ち事切れて居た。其の他、附近全潰數棟、幸ひ他に死者は無かつたが、負傷者は相當にあつた。

日は即ち夕方になり、東京方面に立ち昇る一種の妖雲は、是ぞ大東京の大震大火災である。自分は再び役場に引き返し、取り敢へず救助米を各區（今の町会）に配附し、一方郡役所に救助の急報を發した。

餘震は間斷なく起り、當夜は勿論、翌日より連日に亙り、庭又は竹林に假小屋を掛け寢食を續けた。

東京の避難民は、東北本線の汽車に鈴成りとなつて地方に落ち延び、陸路は、蕨、乃至鳩ヶ谷街道を、北

に北にと殺到し、吾が村も、親戚縁者の避難民三千人と註された。

斯くして、餘震は約一週間に亙り、人心尚ほ恟々たる中、役場は吏員總出勤にて、被害状況を調べ、其の第一回の発表は、民家全潰百三十三、半潰百二十六、死亡六、負傷十二、學校全潰一、寺院全潰五、半潰一、工場全潰五、其の他土木工事では、堤塘三ヶ所、樋管一ヶ所、水路七ヶ所、橋梁六ヶ所であつたが、第二回第三回と、調査を重ねて、最後全潰四百有餘棟となつた。是れが爲め、罹災者の救助は、人員にて八百三十一人、救助米にて二十一石八斗、味噌二百十八貫、救助日數八日間に亙つた。畏くも、攝政宮殿下より、御内帑金御下賜あらせられ、其の金額は全潰者一千六拾四圓、半潰者五百四圓、死者九拾六圓、負傷者四拾八圓、計一千七百拾四圓を傳達された。

其の外、各府縣篤志者より寄贈を受けた、木綿裏地及長襦袢、其の他日用雜貨類、山と積まれ分配せられ、尙ほ外國より毛布百四十七枚を寄贈せられ、罹災者資産の狀況に依つて分配した。

以上大震災に當り、畏くも、攝政宮殿下、深く宸襟を惱まし賜ひ、九月三日を以て、優渥なる御沙汰書、竝に内帑の資を賜ひ、更に同月十二日を以て、戊申の大詔を渙發せられた。

吁々、咽元過ぐれば熱さを忘る、指を屈すれば十有四年、さしも深刻なりし記憶も、いつしか解消せらるるの有様、況んや前期先代の災厄は、今は談にする人さへ稀である。



埼玉県北足立郡大正震災誌より抜すい

震災美談及逸話

はし書

世は寸善尺魔とやらで兎角善行美談の世に表はるゝの藪きは太遺憾なり、近時人情紙の如く薄く左なきだに危険の光景心目に映ずる時、他を顧ること、云ふことは甚だ安くして實は甚だ難し、然るに大正十二年九月の震災當時郡内に表はしたる善行美談を聞き太く人意を強ふするに足るものあり。

左に之を紹介せんとす

勇敢の一群 北足立郡芝村

- | | | | |
|--------|-------|---------|--------|
| 小泉 金三 | 小泉 清作 | 駒 吉右衛門 | 武笠留 五郎 |
| 石川 正也 | 高橋 金藏 | 春山 仁左衛門 | 春山 照雄 |
| 本多 辨一郎 | 江口 一郎 | 本多 榮吉 | 本多 市五郎 |
| 小宮 とめ | | | |

大正十二年九月一日の震災に際りては本村は川口町に次ぐ激甚地にして倒潰家屋三百貳十四棟の多き達し、半潰亦一百二十五棟を數ふ、此時に方り危険を冒して潰家に突入し人命救助に努め本多與三郎以下九名を救へ出せり、其の勇敢なる右十三名の行爲は實に他の模範なりと云ふべし。

涙が流れて來ます

北足立郡川口町尋常六年生押田歌子さんは其土地が震災地であつたので、學校としては別に義損等に就ては勧誘しなかつたに拘らず、校長の校庭訓話平素受持訓導から東京方面の慘狀の話を聞き、之に感激して自發的に日頃貯蓄した金で當用紙二百枚を買ひ求め其れに次の文書を添へて國民新聞社を通じて罹災兒童に贈つた。此事は友人も學校も知らなかつたが、十月十四日の國民新聞の地方版に「涙が流れて來ます」と云ふ見出で掲載されて始めて彼女の美舉が知れたのであつた。「定めし皆さんが御困りの事と思ひます。私は幸に焼けませんで學校に行くことが出來ましたけれども、皆さんの事を聞くと自然に涙が流れて來ます。私は御小遣を使はず此の當用紙を差上げますからどうぞ私の心をうけて下さい。」

十月十三日

川口小學校六年生

押田歌子

國民新聞社御中

罹災兒童へ

川口町の一婦人が九月廿日川口小學校に出頭、佐久間校長に面會し次の申入をなした。

「今度の大地震で罹災した方の子供さんが當校に居られるといふ事を聞きましたので、本當にお氣毒に思ひまして當校へ御厄介になつてゐる三人の子供が平素貯金しました金と私の小使錢とで廿五圓御座いますからさういふお子さん方の何かの足しにして頂きたう御座いますから」と云つて婦人は尙「公にする程の事でもございませんからどうぞ内々に」とくれぐれもの頼みに校長も強いて姓名は聞かず只「大后」と云ふ姓の

み、やつとの事で本人から聞いて此の金を預つた。

翌日表紙の色彩も美しい雜記帳二冊、鉛筆二本、半紙二帖、太筆一本宛が罹災兒童の各の手に渡つた子供の面にはいづれもいひ知れぬ喜びの色が見えた。

奇特の義俠

北足立郡川口町三、二九八 濱 田 庄 吉

大正十二年九月一日震災の爲京濱地方より本町に押し寄せ來たる避難民は、其數實に何十萬なるを知らず其の間に於て自己所有の劇場を開放して避難所に充て罹災民を收容し私財せこなうを損て食料の給與、寢具の供給をなし連日連夜東奔西走の活動をなして救護に努むるの義俠に對し涙を流して感謝せりと。

ちなみ 因に救護したる人員實に貳千餘人に及びたりと洵に奇特の行爲なり人は皆斯あらず欲しきものなり。

親を探す

北足立郡川口尋常高等小學校教員 角 田 鷹 治

灰燼の殘骸は人毎に恐怖と下安とを與へ燒死者の屍から發する怪しき惡臭は都會の地面を縱横に匍ひ、尙混亂状態であつた九月六日正午と覺しき頃であつた。「川口尋常高等小學校教員角田鷹治」燒野になつた廢都街を彼方此方と何をか索もとめんとする視線を放つて居る男の左胸部には斯く書かれた白布を縫ひつけられて居た。

九月三日の夕罹災避難民宿泊を斡旋し同校職員總勢を擧げて救済に従事して居た時町役場より送られた兒童、女兒四名男兒一名の孤子があつた。彼等は既に泣き飽かして涙を有つて居なかつた。臉は赤く瞳には絶望か

ら來る不安と寂しさに小女らしき輝きを失つて居た。其れは二組の姉妹と一人の少男であつた飯島清子、同澄江と呼び、田島つぎ、同えいと云ふ少年は立花正夫と云つた。角田君は五人の子等の恐しき物語と親兄弟を見失つた衷話に痛く同情し、又或は生別であり死別かも知れなかつた慰めの言葉を繰り返しつ、校舎の一遇に席を付けて日々の食事を與へ童話等を話した夜は幾度か見廻つては寢姿を直してやつた而して兩三日過ぎた。

淺草區田中町三

同區淺草町百三

九月六日與へられた一日の休暇を利用し數日の徹夜の疲勞を癒やしませず末明より入京した同君は田島、飯島姉妹の親を探すべく上記の如く住所を誌したカードしよを手にして灰燼の街を歩いて居た。胸の白布の主は角田君であつた。日暮里驛を下車した同君は金杉町より三の輪に抜け龍泉寺前の電車通りを淺草公園に向つたが、目的の地は反對の方角であつた。「北の方ですよ」行く人は君に是れだけしか答へて呉なかつた。「北へ」吉原の燒野の黒こげの屍の山を眺め山谷の通りで北へ進み「さんや」停留場迄來た。燒けたぶりき板に誰かゞ消息を知らせて田中町三と書いてあつた。奇遇を祈ながら聲を張りあげて叫んだ一婦人、憔悴きつきょうした姿を堀立小屋より出し「田島と云ふのは宅ですか貴方?」「里島さんですか有難ふ宜かつた」君は感激に躍り乍ら性急に子供等は無事埼玉縣川口小學校に救護されてることを告げた。「本當ですか」と喫驚しし「子供は生きて居て呉れたつて」と小屋を回顧して叫ぶ家中が雪崩の様に出た總ては君に三拜九拜して泣いたとの事、其れから飯島家も無事見出すことを得て其等の父母を伴ひて歸郷し五人を父母の許に(少年は住所を知らないが近所であつた)歸すことが出來た。彼女等は其の後父の郷里に歸つて都の復興を待ちつ、當地の小學校に居るとの知らせか同君宛にあつた。五人の子等の暗がるべき將來を再び明いものにした同君の清い熱情が此の美學をなしたのである。

少年少女の未だ若き教導者として現在の同君の行動は震災中に於ける美談であつた。

震火災に対する避難の方法

一般的には色々といわれていることですが先人の残した貴重な教訓がありますので原文をなるべく忠実にとらえるため、あえて要約せずに掲載させていただきました。

震火災に對する避難の心得

(震火災豫防調査會編纂轉記)

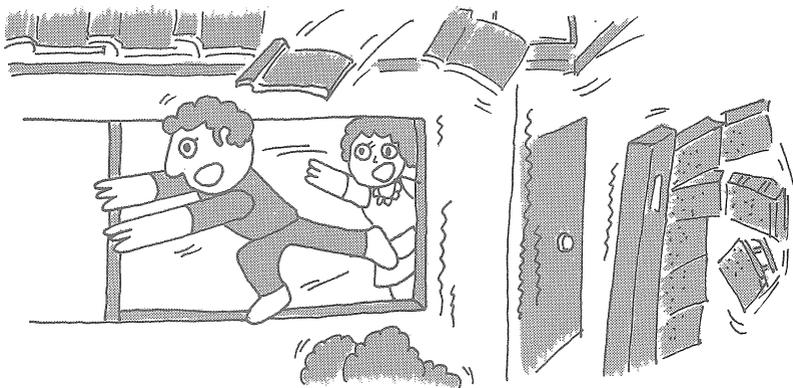
一、避難の方法

震火災に際して避難の方法宜しきを得ると否とは罹災の程度に至大の關係を有するものであるから之を研究することは極めて重要な事たるは多言するまでもない

避難の方法には震災に對する場合と火災に對する場合との二つがある何れも平素豫定せる方法順序を基礎とし之に其の災時の情況を加味して臨機應變の處置を執ることが必要である

一、屋内から逃出る時の心得

屋内から屋外へ逃出る時最先に執るべき處置は震動を感じると同時に戸障子襖等を急速に開放して直に屋外に逃出ることの出来る様にする事



である若し之を怠れば家屋傾斜の爲め全く開閉の自由を妨げられ屋外へ逃出るに困難することある

震災には屋外へ逃出ることが原則であつた屋内に其の儘留まることは變則である併し震災は火災と違つて屋外に逃出する時は種々の危険が伴ものであるから十分考慮せねばならぬのである然らば如何なる場合には屋外へ逃出して可なるべきか普通は左の場合に限られてを但し自家に火災の起つた時は如何なる障害があつても屋外へ逃出さねばならぬことは多言するまでもない

(イ) 屋根其の他の高處から瓦看板庇壁等の墜落する虞のない時

(ロ) 附近に於ける建物の倒壊する虞のない時

(ハ) 庭園又は空地等避難する場所にある時

(ニ) 直に道路又は他の安全な場所へ避難し得る時

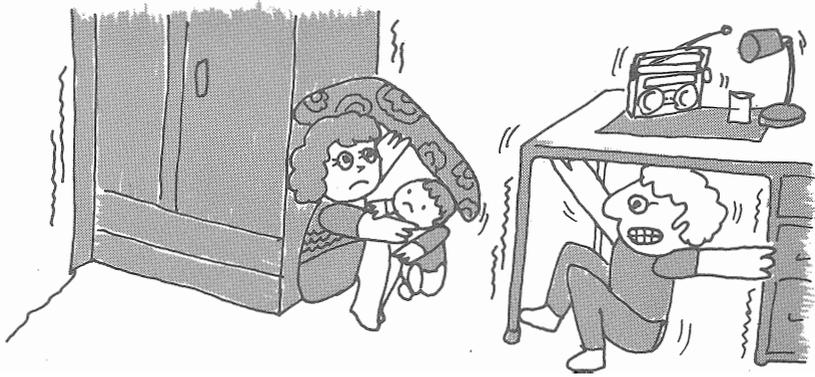
右の場合は大體に於て屋外へ逃出るがよい而して震動を感ずると同時に逃出ることが出来なかつた場合には其の一震動が終るのを待つて敏速に逃出せるようにせねばならぬ

又屋外へ逃出るときは座蒲團若しくは毛布の類を頭部に被り若しも是等の品がなかつたならば本箱の蓋でも書籍でも帽子でもよいから手當り次第に何かを持ち出し夫を頭部にかざして高處からの墜落物を防ぐ様にすることを忘れてはならぬ

右は平屋建の家屋又は階上のある家屋であつても階下に居つた場合等比較的屋外へ出ることが便宜な場合を述べたのであつて階上に居た時に屋外へ逃出る場合に就いての心得は別に之を説くことにする

二、屋内に其の儘留まる時の心得

震動の長短、強弱及び自家竝に隣家の建物の状態等の關係で屋外へ逃出ることの不可能な場合もないでは



ない此の場合には勢ひ屋内に留まるより外に途はない即ち左記の場合には屋内に留まるべきである然れども機会があるならば屋外へ逃出ることを忘れてはならぬ

- (イ) 屋根其の他の高處から瓦、看板、庇壁等の墜落する虞のある時
- (ロ) 附近の建物の倒壊する虞のある時
- (ハ) 庭園又は空地等避難する場所のない時
- (ニ) 直に道路又は他に安全な場所へ避難し難き時

己むなく屋内に其儘留まる場合には震動の強弱の方向等を考へ比較的安全な箇所を求めて座席を定め其處に横臥して居るがよい此の場合に於ける安全な箇所とは四囲に柱の多い狭い室で且つ平屋建になつて居る處を云ふのである尙幸に火鉢、食卓、机、箆筥、長持、米櫃、トランク、金庫又は蒲團等があれば其の附近に身を潜めるか又は夫等の物品を二ノ字形三ノ字形又はコノ字形ロノ字形等に配置し其の間に潜む様にすれば萬一家屋が倒壊しても大體に於て一身の安全を保つことが出来る

三、階上に居つた時の心得

震災の時階上に居つた場合には左記の心得を守つて臨機の行動を執るがよい

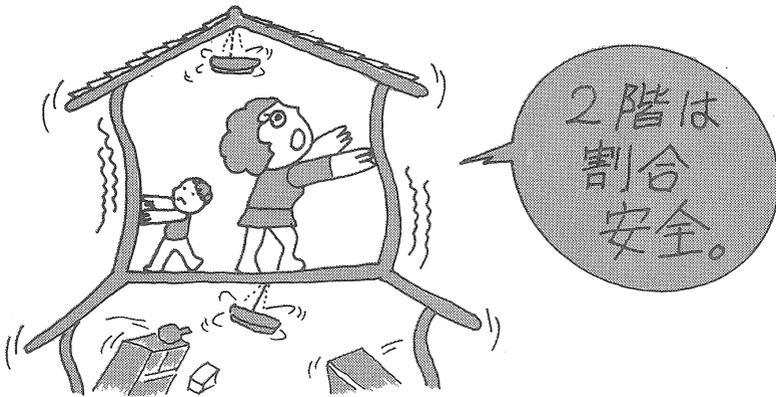
- (一) 階上に居つた場合には震動の繼續中は階下を経て屋外へ逃出づ

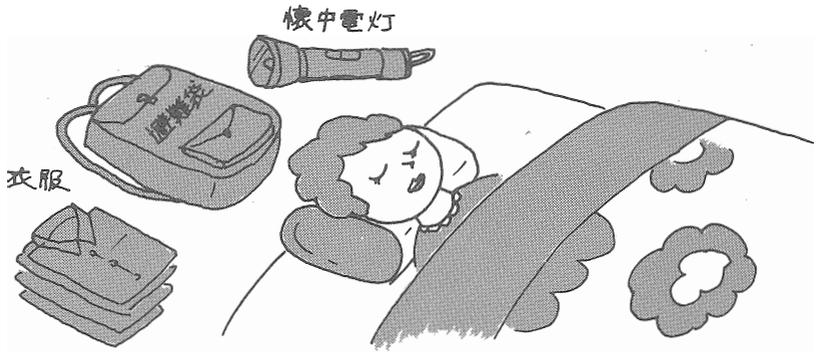
ることは頗る危険である故に其の儘階上屋内に留まるか或は又屋根へ逃出るがよい但し煉瓦造鐵筋コンクリート造の建物は上部は崩壊しても下部は崩壊せぬものであるから階下へ下るのが安全である

(二) 一旦階上から屋根へ逃出たならば震動のため墜落せぬ様に屋根棟其の他安全の箇所へしかと身を寄せて居らねばならぬ

(三) 階上から直に地上へ飛下る様な事は断じて避けねばならぬ幸に地上へ飛下りても負傷したり生命を失ふ様な危険があるからである

(四) 繩梯子又は細引等があつたならば直に夫れを柱其の他に結び付けて地上に下りる様にするがよい若し是等のものがなかつたならば兵子帶其の他適當のものを継ぎ合はして繩梯子若しくは細引に代用するがよい
細引又は帶等にて階上から地上へ下るときに注意せねばならぬことは手に手拭、手巾、又は着物の袖、洋服の上着等を巻き附けることである然らざれば摩擦の爲に手に負傷することがある





之を要するに木造家屋では階上に居つた場合には安全に屋外又は屋根へ逃出ることが出来れば格別であるが然らざれば寧ろ屋内に留まる方が安全である例令家屋が倒壊しても其の倒壊は階下だけに留まり階上は其の儘倒壊を免れて何等の危険もなく容易に屋外へ逃出ることが出来る場合も全くないのである今回関東大震災の際にも此の實例は甚だ多かつたのである

四、夜間に於ける場合の心得

今回の関東大震災は晝間であり濃尾大震災も亦拂曉であつた爲夜間に比して大に好都合であつた併し今後の地震は晝夜其の何れに起るとも圖られぬ去れば夜間に地震が起つた場合の事も一通り心得て置かねばならぬ

夜間に起る震災に對する心得は左記の二三である但し同じ夜間でも就寢時刻前であれば屋外の闇黒な爲に多少の不便がある外さして晝間と大差がないから此の場合に於ける心得は省いてたゞ就寢時刻後に於ける場合の心得のみを説くことに止め様

- (一) 震動を知ると同時に先づ屋外へ逃出づるのみに都合が宜い方向の戸、襖、障子等を開放することに注意せねばならぬ
- (二) 先づ幼児や老人を抱き起し共に屋外へ逃出る様にせねばならぬ

幼児などは揺り起しても容易に寢覺ぬものであるから寢た儘抱いて逃出るがよい寢覺めるのを待つが如き緩漫なことは危険である

(三) 就寢の時には必ず脱ぎたる衣服を正しく疊んで枕元に置き屋外へ逃出ると同時に持出す様にせねばならぬ

(四) 懐中電燈は必ず常に用意して置いて是亦枕元に置きいざ地震と云ふ時直に室内を照らして家族の避難に便せねばならぬ就寢中突然地震などの起つた時には狼狽の結果所謂戸惑して方向を誤る様な事があるからである

(五) 冬季等にあつては先づ炬燵、行火等火氣あるものを屋外に持出すか又は其の火を消すかせねばならぬ就寢中電氣燈をつけ又はランプ、行燈を用ひて光明を採つて居た時は其の火を消すべきことは言ふ迄もない

(六) 時直によつては屋外へ逃した場合に防寒、防雨雪等の工夫をせねばならぬことがある之には震動の切れ間を見て防寒用具其の他笠、傘等を持出すがよい若し餘裕がなかつたならば樹下に避けるか雨戸を外つて防雨雪用にするかなど臨機の處置を執らねばならぬ

五、庭園へ避難した時の心得

屋外へ逃出して庭園に避難したときには自家又は隣家の倒壊することがあつても危険でない位置に座席を定めねばならぬ又高塀、石垣、石燈籠、門等の如き建物に近い所は危険であるから避けねばならぬ尙成るべく竹藪か樹木のある處を選んで位置することが必要である



二、他所へ避難する時の心得

幸ひ屋外へ逃出しても火災の爲或は家屋倒壊等の爲自宅の庭園又は其の附近で休養することの出来ぬ場合には何れかへ安全の場所を求めて避難せねばならぬ次に此の場合に於ける心得を述べ様

(一) 避難の時機

震火災に際しては避難の時機を決定することが極めて大切である假命たとえ事急ならず悠々として避難し得る餘裕があつても餘り落付き過ぎて時機を失ふときは圖らぬ危険を招くことがある「マサカ」「マサカ」と思つて居る内に危険が迫つて來て所謂「後悔先に立たず」の悔に陥つた例は極めて多い故に避難の時機は寧ろ早きに過たるもおそま晩きに失せね様にするのが肝要である特に幼兒、老人、婦女さては病人、負傷者などがあるときには一刻も早く避難するか或は又是等の者丈を先づ避難させて自分等丈最後にて踏み留まるが等臨機の行動を執るがよい尙避難に際して特に留意すべき一事がある夫は家財せに執着して避難の時機を失つた様にする事である僅かの家財否假令多大の家財にしても貴重なる生命には決して替へられぬ筈である去れば家財に執着して遂に其の生命を失ふ様な愚に陥いてはならぬ今回の關東大震火災の際に

も濃尾大震災の時にも僅かの家財に戀々として生命を失つた實例は可なり多かつたのである深く戒めねばならぬ。避難の際第一の注意すべき事がある即ち他から尋ねて来た人々に對して避難先の解かる様にして置くことが夫である家族の或者が外出の留守中罹災した時などには其の外出者が歸宅する場合もあるし又親族知人等が見舞の爲め訪問する場合もある而して此場合に其の避難先が不明であつたならば非常に迷惑を掛けることになる去れば避難する場合に適當の方法によつて其の避難先を明示する様にする事を忘れてはならぬ

(二) 避難時の携帯品

避難するときには先づ重要書類や金銭等は必ず之を携帯する様にせねばならぬ是等は何れも胴巻に入れしかと肌について携帯するがよい若し腰に附けたり手に持つたりすれば大抵途中で落したり人に取られたりする虞がある尙出来るならば金銭は主人と主婦及び其の他主なる者の夫々に分配して携帯させる様にすれば萬一其の人が途中で離散するることがあつても當座の支拂に困る様な事がなくて便利である





次に又是非携帯せねばならぬ物は握飯と梅干と飲料水とである尙都合が付たならば米、味噌又は鹽しお及び生の野菜類若しくは果物等である言ふまでもなく是等は飢渴きかつを訴へる場合に備ふる爲であるが又一面には疾走したり火事場即ち高熱の場所を通過したりすると身体の水分が缺乏して心臓麻痺まひを起すことがあるから之に備ふる爲にも必要なのである

大根は果物と同じ様に生で食することが出来而かも多量の水分を含んで居るから他の野菜類に比し最も重寶な野菜である蕪かぶも亦之に次く効果がある故に同じ野菜類を携帯するならば此の種を選ぶのが有効である果物も出来るならば水分の多い柑類かんるい等がよい以上の握飯にぎりめしや飲料水又米や野菜は成るべく多くの人々に分配して其の重量は容積とを少くする様に包装して手に持つか又は背負ふ様にするがよい若し重量が多く容積が大に過ぎたならば途中で或は落し或は放棄せねばならぬこともある尙各人に分配して携帯させるのは其の人々が途中で離散した場合の用心にもなつて好都合である尙茲ついでに序を以て述べて置かねばならぬ一事がある夫は久しく飢餓に苦しんだ場合に食料を得たときの心得である即ち紋上の如く飲食物を都合よく準備し携帯しても一定の時日を経過すれば飢餓に迫らぬ

こともないではないし又若し不幸にして敍上の如く携帶することが出来なかつたならば當然飢餓に迫ることがある斯くて一晝夜も二晝夜も一杯の水一碗の飯さへも口にすることの出来なかつた場合幸に飲食物を得ることがあつても先ず粥かゆの一碗に満足して暴飲暴食せぬ様に留意せねばならぬ然らざれば忽ち胃腸を害し疾病に罹り其の極はて生命を失ふ様にならぬとも限らぬ去れば長く飢餓に苦しんだ時には吳々も飲食物を慎み少量より普通に又軟かき粥の様な物より普通の飯に及ぼす等の注意を怠らぬ様にすることが肝要である

三、避難の時の服装

震火災のため屋外へ逃出したときには着のみ着のま、時宜に依つては寝巻の儘又は裸の儘な事もあるから避難の時に十分に服装を整へる餘裕のないのは當然である然れども幸に家屋は倒壊を免れ又火災にも遭はなかつた場合には夫々の準備も全く不可能ではない依つて一通之を説いて置こう

(い) 成るべく輕装するがよい疾走せねばならぬこともあり又遠方へ逃げねばならぬこともあるからである

(ろ) 火事場を通過せねばならぬ様な場合には絹物や毛織物は火が付き易いから成るべく本綿物を着るとよい若し出来るならば刺子羽織に刺子頭巾が宜い而して火中を通過せねばならぬ場合には言ふまでもなく頭から足の先まで帽子、衣服其の他水で十分濡すことを忘れてはならぬ

(は) 頭部には帽子を被るか又は手拭を頬被りをし火事場を通過せねばならぬ場合には座蒲團を水に浸し之を水で濡らした手拭でしつかと頭に括くわりつけ言ふ迄もなく衣服も水で濡すが宜い旋風の爲め空中に捲き上げられた墜落物や火の粉等を防がねばならぬ場合にはバケツか鐵鍋か飯櫃等を頭部を蔽ふ

様にすることも必要である

(ニ)

履物は刺子、足袋、護謨足袋か靴或は草鞋又は草履がよい但し草履ならば紐を以てしかと足に括りつけることが肝要である混雑の際又は遠方へ行く時には往々途中で脱け落けることがあるからである

下駄や雪駄を穿つたり又は跣などは危険であるから避けねばならぬ

四、避難の方向

避難の方向を定めるには自宅所在地の關係家族の多少並に其の老幼等の關係及び通過路の關係等を考慮し尙且つ當時の災況をも斟酌せねばならぬことは云ふまでもない左に之に關する心得を説かう

(一) 火事場を横に避けつゝ、風上の方向を選ぶべきこと

(ろ) 通過する道路は次の條件を具ふるものを選ぶべきこと

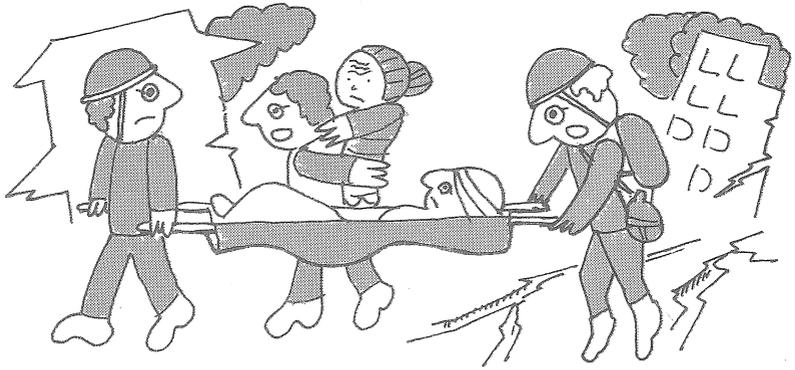
1、成るべく道幅の廣いこと 2、成るべく混雑せぬこと

3、附近に高い建物等のないこと 4、破壊又は焼失し易き橋梁の

ないこと 5、渡船場其の他徒渉せねばならぬ河川沼地等のないこ

と





(は) 成るべく近距離の處を選ぶべきこと

五、避難の順序次第

避難に際して最も先にすべきものは家族である馬や、牛や犬や猫さては飼鳥などは假令生物であつても人間に先だつべきものでない又家族中でも血氣の盛な者は後に老人や子供や婦女さては病人負傷者等は先に避難せしめねばならぬ病院、宿屋等に於ては家族に先だちて先づ其の患者宿泊人等を避難せしめねばならぬことは言ふ迄もない

老人幼者若しくは病人負傷者には夫々附添人を付けることが必要である若し又歩行に堪へぬ者があつたならば車か戸板かに乗せ或は又背負ふ等臨機の處置を執るべきことは勿論である

六、避難の途中

幸ひに餘裕があつて徐かに避難することが出来る場合は途中何等の故障もなく安々と目的地に安着することが出来るけれども萬一時機を失したならば道路が非常に雜鬧して容易に進行することの出来ぬ場合もあつて連立つた家族は離散して行方不明になつたり老人や子供は群衆に踏殺されたりする事などもあり時宜に依つては猛火に包圍せられて進むにも

退くにも方法がつかなくなり遂には焼死せねばならぬ様な悲惨な目に遭はぬとも限らぬ現に今回の關東大震災の際には東京市に於ても横濱市に於ても此の實例は極めて多かつたのである深く慎まねばならぬ事である次に尙二三の注意すべきことを述べよう

(い) 家族一同は互に連立つて離散せぬ様に留意し尙且つ老壯、強弱、男女等お互に助け合ふことの出来る様組合つて避難する様にせねばならぬ尙出来るならば各自の身體中見易き所に適當の目印を附けて置けば好都合である此の場合紐などを用ひてお互に繋ぎ合はす様なことは絶対に避けねばならず是は交通の妨害となり避難の妨げとなるからである避難の途中萬一離散したならば豫め定めて於て避難所へ來會する様に約束して其の會合を期せねばならぬ併し夫も叶はなかつたならばお互に行方を明かにする他の方法手段を執るべきである

(ろ) 携帶品は成るべく少いのがよいさうして幼児は成るべく背負ふがよい然らざれば途中に放棄せねばならぬ困難に陥り幼児などは踏し殺される様な事はないとも限らぬ

(は) 幼児や老人には成るべく其の住所氏名及び戸主の氏名を記



した襷たすきの様な布片を纏まとはしめるか又は迷子札の様なものを附けさせて置くがよい
行方不明になつた時又は死亡した時などには其の身元を知ることを得て雙方の便利である

(に) 金銭は成るべく各自別々に分配して携帯するがよい飲料水、食品なども同様である若し一人丈が纏めて携帯して居たならば萬一散した時に困難することがある

(ほ) 猛火、煤煙、又は熱風に襲はれた時は一時河邊其の他低地に避け火焰ほのおや煤煙に對しては他面に近く接して匍匐する様にすれば多少苦痛を避けることが出来る

(へ) 容積の大きな荷物重量の多い物品や又は荷車などは決して携帯してはならぬ到底満足に携帯し得られるものでない又之が爲に圖らざる困難に陥ることもある

(と) 途中火事場を通過せねばならぬ場合には衣服を水に浸して着、帽子又は手拭等を濡して頭に被る様にするがよいそうして又手拭或は手巾に水を含め口にくはへて行けば息切れを防ぐことが出来る。

七、猛火に對する心得

大震災には必ず大火災の伴ふものであることは前屢々述べた通りで今回の關東大震災火災は其の活きた實例であつて震災の爲に避難し更に又火災の爲に避難せねばならぬ様な事があつたのである否寧ろ震災の爲の避難よりは火災の爲の避難が多かつたのである而も其の火災の多くは尋常一様の火ではなくて怒れる猛火の凄まじい勢の大火災であつたので避難も中々容易の事ではなかつた之が爲猛火に包まれて進退きわこれ谷まつて焼死するに至つた者が十數萬の多きに上つた

夫如斯大震災には必ず大火災が伴ふものであるから村落等の如き民家の疎まばらな處以外即ち市街地などにあつ



ては大震災の際には猛火の爲めに包圍攻撃を受ける様な事も有勝であると思はねばならぬ随つて斯る場合に處する道も一通り心得を置くべき必要がある

猛火に包圍された時は如何にして其の難を免るべきか斷然猛火の中を突破して活路を求むべきか或は又河川、沼池、井溝等に身を投じて火勢の減退を待つか執るべき途は只だ此の二つより外にない次に此の二つの方法に對する心得を述べよう

一、猛火の中を突破する時の心得

猛火の中を突破する事は萬策盡て如何ともすることの出来ぬ場合に限ることは言ふまでもない随つて他に方法の執るべきものがあつたならば斷じて此の窮策に出て、はならぬ

倅さて猛火の中を突破し様とするには相當の覺悟と相當の準備と相當の心得とがなくてはならぬ

猛火の中を突破することは萬死に一生を期する所以であるから非常に危険な事は勿論である去れば再び生還を期せられぬものとしての覺悟を要する

又多人數同時に連立つて決行するには極めて困難である故に多くも二人位づ、相扶けづ、決行するのが必要である老人幼者の如きは言ふまで

もなく背負つて突破するより外に方法はないのである

頭部は水に浸した手拭或は前垂等まへたれを用ひて蔽ひ全身も亦水に浸した衣服で包み足には草鞋か靴うがを穿ち顔面其の他露出せる個所には泥土を塗る等の用意を忘れてはならぬ

斯くて火勢の最も弱く通過距離の最も短くして尙且つ最も安全なる通過路を選ばねばならぬ

一旦決心したならば猛然として疾走し奮然として脱出すべきである決して途中で躊躇ちゆうちゆうする様な事があつてはならぬ

二、河川、沼池、井溝等に身を投じて火勢を避ける時の心得

河川、沼池、井溝等に身を投じて火勢の減退を待つことは前記の如き猛火の中を突破する場合に比し安全ではあるが是亦危険が少くないから十分の警戒と注意とを要する沼池、河川、井溝等に身を投じた場合は第一火の粉を防ぐ爲頭部を水に浸したる帽子、手拭若しくはバケツ、飯櫃めしびつ等を破り又水中に投じたときは木片其の他水に浮ぶ物を手にして沈没を防ぎ若し寒冷を感じるときは務めて身體の各部を運動又は摩擦して凍傷凍死を豫防せねばならぬ淺瀬のある場合には其處を選んで居り又其の淺瀬を傳つて川上又は川下等安全な場所へ避難するがよ

い





水深くして水泳を要するときには急速に衣服其の他水泳の妨げとなるべきものを脱ぎ捨てることを忘れてならぬ

成るべく橋下若しくは浅瀬を求めて避難し船筏等あらば之に乗じて避難するがよい

井へ潜むときは水底に落込まぬ様に水に浮ぶ物を携へることを忘れてはならぬ幸ひに長い木又は柱等があつたならば夫を用ひて中途に居を占める様にするがよい言ふまでもなく火の粉其の他を避くるため頭部を適當に蔽ふべきである

溝へ潜む場合には身を横たへねばならぬから火の粉其の他を避くるため體上に戸板其の他適當のものを載せるか又は溝中の泥土を取つて頭部其の他に塗布するがよい

八、旋風に対する心得

大火災の際には往々其の中央部に旋風即ちつむじ風の起ることがある而して旋風の威力の強大なことは一寸想像の出来ぬ程である松や櫻の大木を根こそぎにして高く上空に捲き上げ荷馬車なども馬諸共に十數間の高さに捲き上げ人間の如きは十數町の遠方へ吹き飛ばしたん板の如きは木の葉を散らす様に吹き飛ばしたことは今回の關東大震災火災

の際實見した所である。

旋風の威力は斯の如く強大であるから若しも之に遭遇したならば如何にして其の難を免るべきかは非常に困難な問題である併し幸に避難すべき餘裕があつたならば旋風域外へ逃出すか或は堅固なる橋梁の下か建物の下又は樹木の根元へ避くるかの外に安全な途はない若しも不幸にして紋上の如く安全場所へ避難するの餘裕がなくて露出した平地に居らねばならぬ場合は伏臥して萬一の僥倖を期するより外に方法がない而して此の場合には成るべく地面に身體を伏せて何かにしつかとつかまつて空中に捲き上げられぬ様すれば安全である但し平地伏臥するときは旋風の爲め捲き上げられた種々の墜落物のために死傷を招くこともあつて一得一失を免れられぬ

幸ひにして旋風に捲き上げられずに濟んだならば樹木や橋梁又は建物の下に居る場合の外は墜落物のために害を被ることがあるから頭部其の他を適當な物で蔽ふ様にせねばならぬ



自主防災組織の進め方

市において実施した住民意識調査によると、なんらかの形で協力するは全体の七六%となり自衛組織づくりに賛成である。これは大震災時にいかに自主的な防災組織が必要か、十分に理解されていることを示しております。大地震から身を守るためには住民一人一人が防災意識を持つことが必要であり、特に事にあたっては地域の人々の防災活動がなければいかに立派な防災計画があっても無意味であります。

それは当然大災害時には交通途絶により消防隊等の活動が困難でありましようし、このような時こそ地域の連帯感に支えられた防災組織がコミュニティ活動の一助として活躍することが望まれます。

ではなぜ自主防災組織が必要であるのか、前にもふれましたが具体的には

- 一、同時に各地で火災が発生すると、消防力が分散されてしまう
- 二、道路、橋、建物の破損、倒壊により交通事情が悪化する
- 三、道路上の危険物（自動車等）により交通は著しく阻害される
- 四、電気、電話が不通となり情報の伝達が困難になる
- 五、水道管の破損、貯水そうの損壊により消火活動が十分行えない

等のため、防災活動が阻害されることが予想されますので、被害の防止、軽減を図るため住民による住民の自主的な防災活動が望まれるわけです。それでは、その活動というのはどのようなものがあるのか次に例記しますと、

- 一、出火の防止

二、出火したら初めのうちに消し止める

三、被災者の救出、救護

四、自主的な避難

一から四まではいざという時のために自主防災組織で随時訓練を積み重ねることが重要になります。

組織づくりを進めるうえで、小谷場町会で防災組織づくりを進めておりますので参考に規約等を掲載いたしました。

小谷場防災隊規程

一、目的

第一条 この規程は、小谷場町会における（火災、地震等）防災管理の徹底を期し、もって災害による人的物的被害を最少限に軽減することを目的とする。

第二条 前条の目的を達成するために必要な事項を定める。

二、防災管理機構

第三条 防災管理を組織的に進めるため、防災対策委員会を設ける。その委員長には町会長があたり副委員長及び隊長、隊員は委員長がこれを委嘱する防災隊員は町会員の内から隊の主旨を理解するとともに活動的で積極的に協力できる人をもって構成する。

第四条 組織の編成と役員は次のとおり定める。

- (1) 委員長 一名
- (2) 副委員長 若干名
- (3) 隊長 一名
- (4) 副隊長 四名
- (5) 班長 若干名
- (6) 各係員 若干名
- (7) 隊員は委員会委員も兼ねる
- (8) 隊員の任期は二ヶ年として再任は妨げない
- (9) 本隊に顧問、相談役をおくことが出来る。

三、委員会の任務

第五条 防災委員会の任務は次による。

- (1) 防災計画ならびに、これらの実践についての審議
- (2) 防災に関する諸規程の制定
- (3) 防災上の調査、研究、企画、防災思想の普及および高揚
- (4) その他、防災に関する根本的対策
- (5) 委員会の開催は定例会と緊急会の二種とする。(但し緊急会は防災上緊急重要事態が発生した場合委員長がこれを召集する)
- (6) 定例会は毎月又は年六回以上開催する

(7) 防災隊員は基本訓練を受ける。

第六条 災害の事故発生時被害を最少限度にとどめるため委員長を最高責任者としてその下に副委員長隊長
その他必要な係を置く。

第七条 防災隊員の活動について功労のあったものに対しては表彰を行う。

第八条 本会の運営に要する経費は、町会費を充てる。

第九条 この規程は昭和 年 月 日から実施する。

附 則

この規程を改訂する場合は委員会の決定による。

小谷場防災隊心得

一、この心得は、隊員としての重要性を自覚し資質の向上を図ることを目的とする。

二、隊員の責務

隊員は火災地震等の災害時に町会内の安全を図る重要な責任を自覚し任務の遂行につとめなければならない。
ない。

三、連けい行動

隊員は単独行動をすることなく、二名以上をもって行動するよう心掛けなければならない。

四、隊員の心得

隊員は常に健全な心身を保持し、いかなる時でも災害に対処できるよう心掛けなければならない。

五、隊員の良識

隊員は常に町会内全体のために行動するよう心掛けなければならない。

六、訓練等

隊員は常に訓練と町内の実態に精通するよう心掛け非常時に備えなければならない。

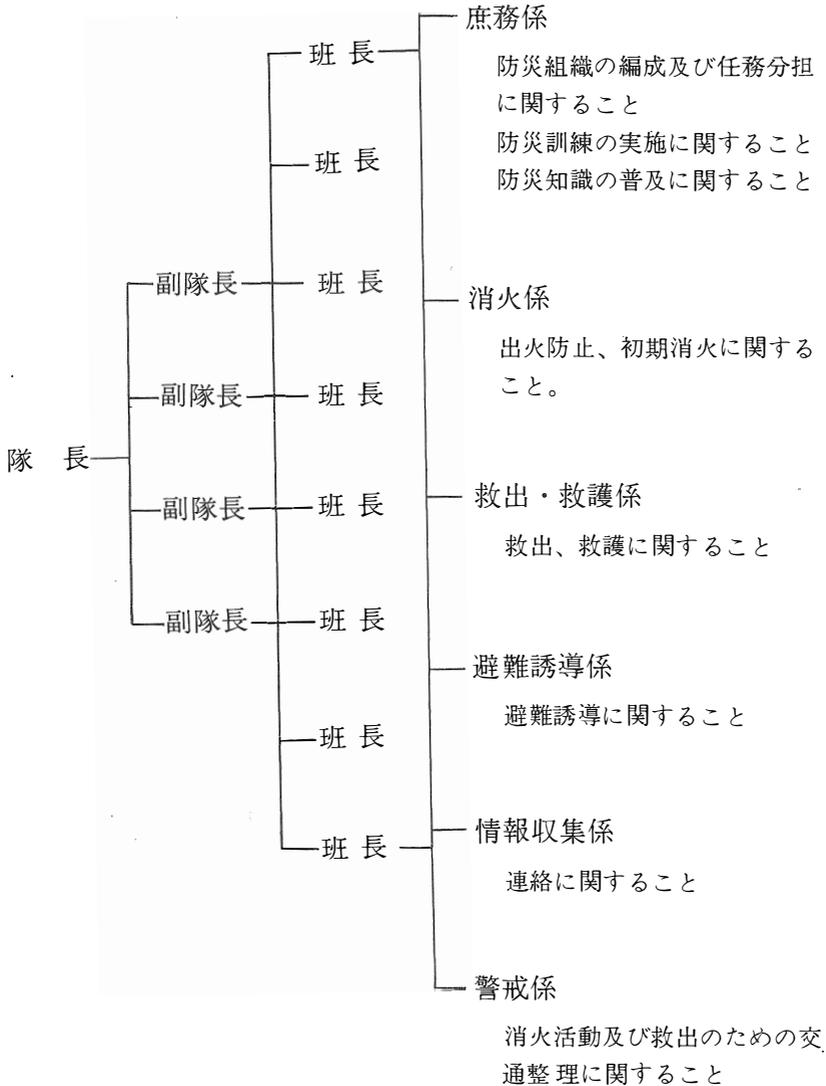
七、町民との接触

隊員は常に言語、態度に十分注意し、隊員外の者に対して威圧的な態度や粗野な言語を用いてはならない。

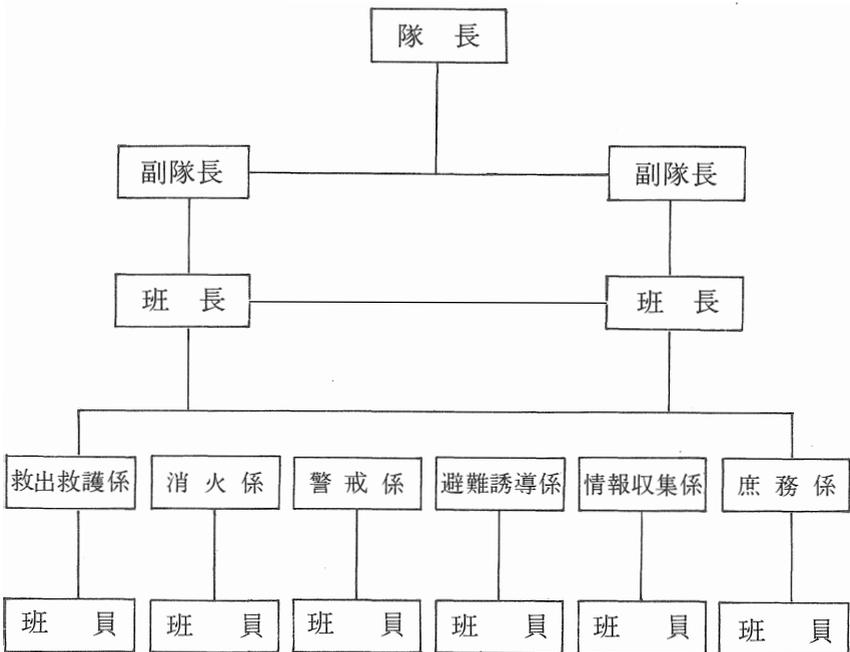
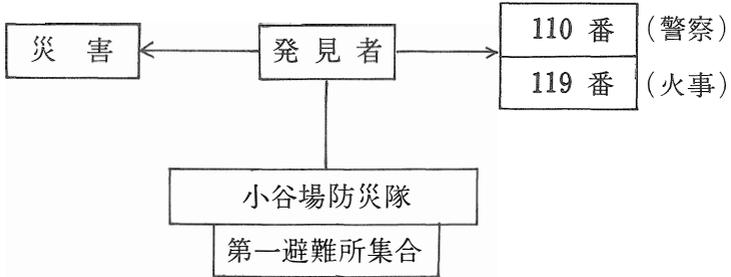
八、隊員の任務

- (1) 平素隊員は、地域内の火災発生防止につとめること。
- (2) 地域内に火災が発生した場合、直ちに（一一九番）連絡すること。
- (3) 地域内に火災が発生した場合迅速に初期消火活動に当ること。
- (4) 隊員は被害状況等を正確かつ迅速には握し、適切な応急措置をとること。
- (5) 消防隊が現場到着時には、ただちに誘導し、必要な情報を知らせること。
- (6) 消防隊が到着後は現場附近の交通整理につとめること。
- (7) 火災が延焼拡大等により地域住民の人命に危険が生じ、また生じるおそれがあると認められるときは避難の誘導に当ること。
- (8) 災害時には、救出救護活動に協力すること。
- (9) 応急器材（壊中電灯、ロープ、救急医療薬）等の準備をすること。
- (10) 隊員は常に事故防止につとめること。

防災組織の編成及び任務分担



防災隊連絡図





編 集 後 記

悲惨な写真を見開きにあえて掲載いたしましたのは、写真の原版から接写のとき、フアインゲーターからのぞくとどの顔もどの顔も苦痛に満ちており、摂りながら涙が出てきて自然に手を合わせてしまいました。私達の子供や孫達にも二度とこのような目に会せないためにも、あえて掲せさせていただきました。写真が写真だけに、一部にはあまりのむごさに批判もあろうかと存じますが、本冊子を見て、少しでもいつ来るかわからない大地震にお役に立てば幸いと思っております。

また、お忙がしいにもかかわらず多くの方々から原稿や写真等積極的に資料をお寄せいただき、特に峰町の小泉増吉町会長さんには貴重な文献の提供と、情報収集等大変ご苦勞をおかけいたしました。

なお、編集中に寄稿していただきました鶴ヶ丸町会の河井万蔵氏が亡くなりました。ここに慎んでお悔み申し上げます。

おわりに本書の編算にあたられました関係の皆様方に、ここに紙上を借りて厚く御礼申し上げます。また本紙発刊にあたって、川口市及び次の団体から助成をいただきましたことをご報告いたします。

- 川口市 一 金 壹百伍拾万円也
- 芝地区社会福祉協議会 一 金 伍万円也
- 芝のふるさとを考える会 一 金 伍万円也
- 芝地区連合町会 一 金 伍万円也
- 川口市農業協同組合芝支店 一 金 伍万円也
- 川口北ライオンズクラブ 一 金 伍万円也

その時！あなたは

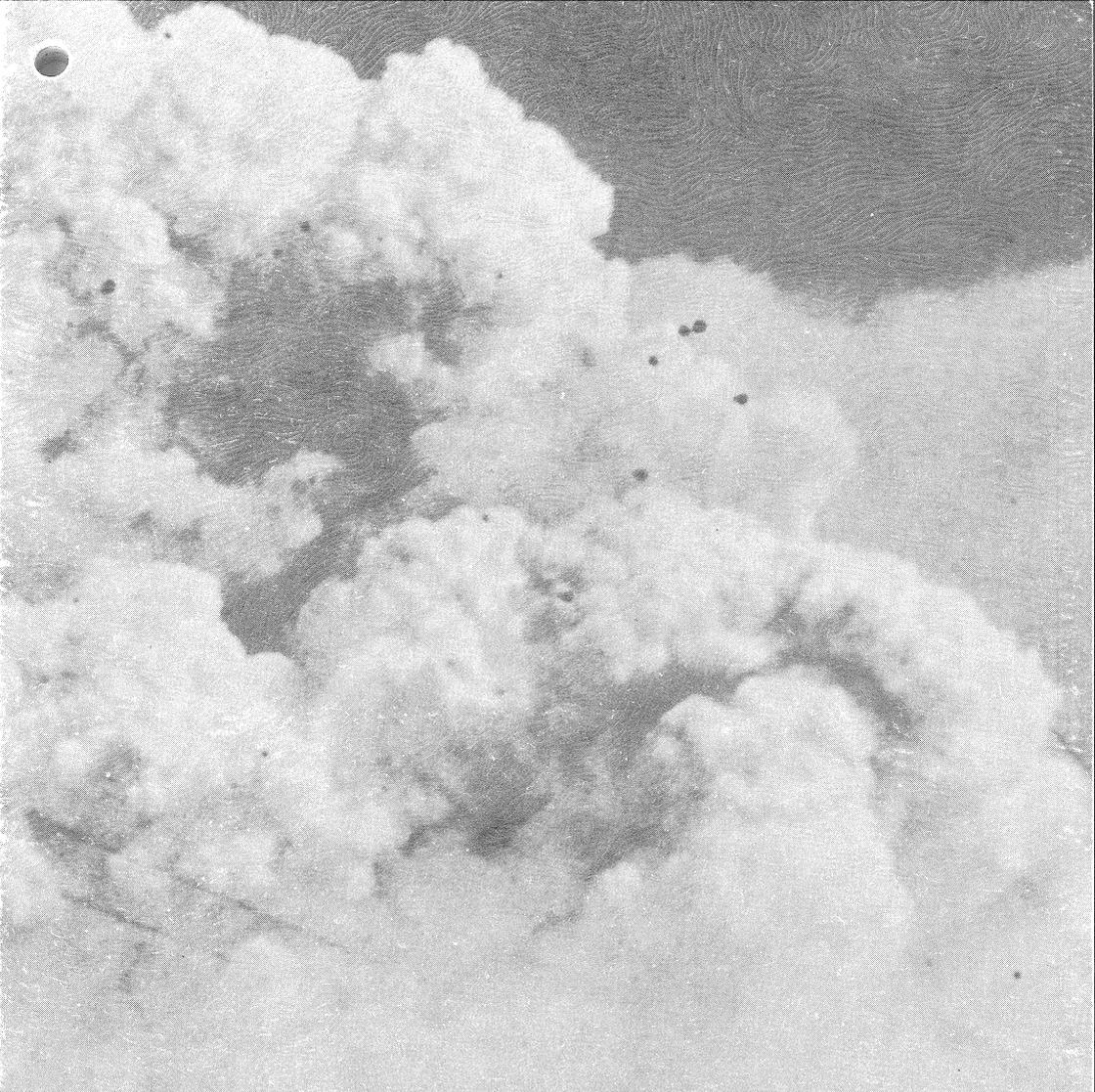
¥100.

発行 昭和55年2月1日

編纂発行 川口市芝地区震災対策推進協議会

発行人 今泉 栄 政

印刷所 巧和工芸印刷株式会社
川口市前川 3-25-3 ☎(66)7684



大正12年9月1日夕関東大震災に
より東京大火災発生直後の入道雲
(川口町より望む)

※安政大震火災にも
現れたといわれている

芝地区震災対策推進協議会
芝地区長寿クラブ連絡協議会